
最弱国家の魔王様

誉人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最弱国家の魔王様

【Nコード】

N0702Y

【作者名】

誉人

【あらすじ】

大学二年生、二十歳の誕生日を迎える浅間霧は、自分を祝ってくれるという人たちの元へ向かおうと玄関を出た。しかし彼の足は地を着くことはなく、真つ暗な世界へと落ちてしまう。明るくなつたその場所では自分のことを「坊や」と呼ぶ美女と、その後ろに跪く男二人の姿があつた。だが彼はその女性も、男二人の姿も見たことがなかった。突然異世界に召還された彼は魔王としての生活を余儀なくされる。

プロローグ

暗い部屋があった。

百人は優に入れるであろう石造りのその部屋は、入口から奥に至るまで左右対称の柱が並んでいる。柱の一本一本にはその国の国旗であろうものがかけられており、室内に灯されたロウソクの光をゆらりゆらりと反射している。柱の間には道を示すための赤い絨毯が敷かれており、それは奥にある階段まで続いている。

階段の上、元は王座が置いてあったその場所には、今は血で記された魔方阵があった。その周囲を囲むようにして、三つの人影があった。一つは女のもので、二つは男のものであった。女は魔方阵の前に跪き、両手を組んで何かを唱えている。傍に立つ男二人と、それを見守るかのように階段下では数十人の人影が黙してそれを見つめている。

その儀式は粛々として、だが確かな熱気を伴って室内の空気を支配していた。

「――」

と、女が突然立ち上がった。しばらく目を閉じたままだった女は、掌を上にして男の一人に手を差し出した。男はそれに何も答えることなく、懷から一本のナイフを取り出した。女も何も言わず、それを受け取ると、逡巡の間もなく、それを掌に突き刺した。だくだくと流れ出す血は魔方阵の中へと流れ落ちていく。数秒か、あるいは数十秒か。流れる血が魔方阵の円の中全てを満たしてから、女はようやくナイフを掌から抜いた。男の一人はすぐさまそのナイフを受け取り、もう一人の男は女の手を取り、自分の手をかざした。すると薄ら明るい光が灯り、次の瞬間には女の掌の傷はなくなっていた。

最後に、血に塗れていた手を拭いてから、女は両の手を広げた。願う。

言葉にする。

そして、魔方陣に力が籠もり――

✽ ✽ ✽ ✽ ✽

その日、浅間霧は一日家に引きこもっているつもりだった。今年で大学二年生、本日をもって二十歳を迎える霧は、自分の誕生日くらいは一人でのんびりしたいと考えていた。

元来のものなのか、はたまた何か切っ掛けがあつてそうなったのかは覚えていないけれど、霧はあまり人と関わり合いになるのが好きではなかった。人が嫌いなのではなく、人付き合いというものが嫌いなのだ。誰かと一緒に居るということは、何かと気を使わなければいけない上に、気を使われてしまう。霧はそれが非常に煩わしく思う人間だった。

こんな性格だから、霧は知人友人というものが他の人と比べるまでもなく少なかった。中高、大学を合わせても、知人と呼べる程度が三人、友人と呼べるのは零だった。その知人にしても、霧が相手にしないというのに向こうがしきりに声をかけてくるというもので出来上がった関係であり、それは大学に入った今も続いている。

お人よしとも呼べるその知人の三人からは、朝からひっきりなしにメールが届いている。内容は、折角の誕生日なのだから皆で集まってお祝いしようという、何とも有り触れたものだだった。

当然の如く、霧はそのメールを見なかったことにした。既に時刻は昼を過ぎようとしている。メールの数もそろそろ二十を超えようとしているが、霧はまるで相手をしようとはしなかった。

「……はあ」

人間とはよく分からない生き物だな、と霧は思った。自分も人間であるはずなのに、自分のことは自分でよく知っているはずなのに、他人の考えていることが霧にはまるで理解出来なかった。

何故、皆で一緒に居ようとするのか。何をするにも誰かと組んで行い、そうしないものがまるで異物であるかのように扱う。中には自分と同じように他人との触れ合いが苦手な人間もいたけれど、それと自分とは違うと霧は感じていた。彼らは触れ合いというものが“苦手”なのであり、霧はそれが“嫌い”なのである。そこには決して交わることもない一線を画している。

幸いにして一人暮らしをしているこの家の住所は知られていないはずなので、外に出なければったりと彼らと会うこともないだろう。そう考えた霧は、今日一日は大学もサボって家でごろごろしていることに決めていた。

それから、霧は決意通り夕方までごろごろして過ごした。昼ご飯を食べ、漫画を読み、少し寝て、ジュースを飲み、また漫画を読む。仕送りなどという高尚なもののない霧は、テレビもパソコンも買う余裕などにはしなかった。唯一自宅にある娯楽といえば、大学一年のころからこつこつと買い集めた漫画本だけだ。

読んでいる本を読み終えて、違う漫画に手を伸ばしたところで、突然霧の携帯が鳴り始めた。霧は着信音を知り合い別に設定していないので、全て同じ音を鳴らす。なので、誰かを確認するには一々画面を確認しなければならない。

多分知人の誰かなんだろうなと霧は内心うんざりしつつ携帯を取り、画面を見た。

「あれ」

そこには知人の名前はなく、霧が高校卒業までお世話になっていた施設の名前が表示されていた。

一般に児童養護施設と呼ばれるそこに、霧は小学校の頃からお世話になっていた。人付き合いが嫌いな霧ではあるが、その施設の人たちには僅かなりの感謝の念を覚えている。流石にこれを見捨てる

わけにもいかず、霧は一つ深呼吸してから通話ボタンを押した。

「もしもし？」

「もしもし、霧君ですか？」

「はい、そうです」

『ああよかった。もしかしたら電話番号を変えてないかと心配だったものですから』

電話の向こうからは安堵の息を吐く音が聞こえてきた。髪は白髪で染まり、顔は今までの苦労を刻むかのように皺が寄っている施設の先生の顔を思い出し、何だか途端に申し訳ない気分になった。彼女がどういう理由で電話してきたのかなんて、今日が何の日か、そして彼女がどういう人かを知っていればすぐに予想はつく。だから本来ならば、霧は自分から施設へと電話をしなければならなかったはずなのだ。

それなのに向こうから電話をさせてしまったことに、霧は少しの罪悪感を覚えた。

「そのときはきちんと連絡をいれますから、心配しないでください」

『そう？ それならいいんだけど、霧君は昔からあまり人と触れ合おうとしなかったから……』と、そこまで言って、先生は言葉を切った。『ああ、ごめんなさいね、こんなことを言いたくて電話したわけじゃないのに』

「いえ……」

何と答えればいいのか分からず、霧は言葉を濁した。

『ええと、それで、今日は霧君の誕生日でしょう？ もしかかったら施設で小さなパーティーをしようと思うんだけど、どうかしら？』

「パーティー、ですか？」

『ええ、ささやかなものでしか出来なくて申し訳ないんだけど、霧君さえよければと思って。それに、霧君が来てくれると子供たちも喜ぶと思うの』

「……」

霧は咄嗟に言葉にしそうになった否定の言葉を噤んだ。如何に霧が人付き合いを嫌おうとも、長年お世話になった人に対する礼儀くらは持ち合わせている。それに、先生が言うように、自分が行けば子供たちは喜んでくれるのだろうという考えも言葉を噤んだ理由でもあった。子供というのは本当の意味で気を使わない関係を持てる、希少な人間だと霧は認識している。彼ら、あるいは彼女たちと遊んでいるときだけは、霧は無駄な柵を感じなくて済むのだ。

しばしの間悩んで、霧は口を開いた。

「……わかりました。じゃあ、少しだけお邪魔しようと思います」

『あら本当に？ よかったわ。それじゃあ、えっと。霧君は何時から大丈夫かしら？』

「先生たちさえよければ何時でも大丈夫ですが」

『そう？ それじゃあええと……あまり遅くてもいけないから、七時半に施設に来てもらえるかしら？』

霧は時計を見た。まだ時刻は夕方の五時半を過ぎたあたりだ。今から準備をして施設に向かってもゆとりは十分にあった。

「分かりました。じゃあ、その時間にお邪魔しようと思います」

『ええ、楽しみに待ってるわ。ああでも良かった。霧君はこういうの嫌かと心配していたから……』

「嫌いではあるかもしれませんが、それも相手によりますよ」

ここにきて、霧は初めて笑った。電話越しではあるけれど、それは先生にも伝わったらしく、安心した声が返ってくる。

『ええ、ありがとう。それじゃあ、待ってるわね』

「はい、それじゃあまた後ほど」

電話を切ってから、霧は布団の上に倒れこんだ。一Kの部屋に万年床となっている布団は、少しの埃を巻き上げながら霧の身を受け止めた。

「誕生パーティー、か……」

両腕を額の上に持つてきて、呟く。目を閉じると、施設でお世話

になった日々が思い浮かんでくる。嫌でも、面倒だとも思っていないことに、霧は何故か安心する自分を感じていた。

少しの間、そうして時間を潰していた霧だったが、目を開けると起き上がった。少しばかりお邪魔するとはいったが、きつと子供たちが寝付くまでは向こうににいることになるだろう。そう考えると、先にお風呂に入っていた方がいいかもしれない。あとは、何か子供たちへのプレゼントも用意していた方がいいのだろうか。そんなことを考えながら、霧は出かける準備を始めた。

一時間ほどして、準備を終えた霧は玄関を出た。ここから施設までは歩いて大体三十分程度の距離しかない。今の時刻はまだ六時四十五分なので、十分に時間はある。鍵をしっかりと閉めたことを確認して、階段へと足を向ける。二階建てのこのアパートは一人暮らしの人向けらしい作りをしていて、鉄製の階段も一人しか通れない程度の狭さだ。それに勾配も急で、暗くなってくると足元が少々不安になってくる。

霧は足を滑らさないように手すりに手を置きながら足を踏み出して。

——落ちた。

「あ——」

足が何も踏めないときに感じる浮遊感が体中を襲う。咄嗟に手すりに伸ばしたはずの手はしかし、何を掴むこともなくすり抜けてしまふ。

——やばい。

このままではこの急な階段を転げ落ちてしまふ。

「——」

咄嗟に思い浮かんだのは施設の先生、子供たちの顔、一緒に育った施設の仲間、そして——幼いころに亡くした母親の姿だった。

次の瞬間、霧は薄暗かった周囲が真っ暗になるのを視界で確認した。頭でも打ったのだろーかと思う間もなく、霧の意識は落ちて行った。

✕ ✕ ✕ ✕ ✕

薄暗い部屋の中に、魔方陣から発せられる途轍もない光が満ちる。

成功した、と女は思った。魔方陣に最も近い位置ににいるというのに、その眼はしっかりと見開かれて今か今かとその時を待ちわびている。それは女の傍に立つ二人の男も同じことだった。片や己の忠誠を誓うべき人物の再来に心躍らせ、片や己が尽くすべき人物の到来に胸躍らせている。それは階段下で経緯を眺めているだけの者たちにもあるのだろう、どこかざわめき立つ空気が湧き上がっている。

光はどんどん強くなり、ついに女も男二人もあまりの眩しさに目を閉じた。

そうして光の強さが最高潮に達したその時——彼は現れた。広間だけではなく、城全体が慄いたかのように揺れた。それは主人の到来を喜ぶ歓喜だったのか、それとも再来を畏怖する震えだったのか。

「……ここは……？」

声が聞こえた。どこか幼さを残した男の声だ。それに反射するようにして、女と男二人、広間に集う人影は一斉に目を空けた。

「おお……」

最初に声を上げたのは女だった。魔方陣にへたり込むようにして座るその男を見て、彼女は溢れ出す涙を隠そうとしなかった。男二人は己の出せる最高速で片膝を着き、頭を垂れた。それにつられるようにして、広間の人影も慌てて各々が膝を着き始めた。

いや、その中で一人だけ、広間の最前列に立つ一人の人物だけは、何か信じられないものを見たかのような表情で王座の位置を見つめている。

「あひ……ひいっ！」

そう叫びながらその人物は逃げるかのようにして尻もちをついて後ずさり始めた。

しかし、今はそんな人物に意識を取られるものはいなかった。壇上にはこの十年彼らが待ちわびた人物が存在しているのだ。例えば今わめいている人物が国の中でそれなりの力と発言力を持つ人物であろうとも、意識を取られるには至らなかった。

壇上では、へたり込んでいた男がゆっくりと立ち上がった。それに合わせる様に、女も立ち上がった。

「おお……おお……」

「ちょ……なんだ？」

女は魔方阵の中に立つ男に近づくと、まるで愛でるかのように手をさしのばした。ゆっくりと、ゆっくりと、確かめるように近づき、その頬に触れる。

突然現れた男——浅間霧はその手を掴むと、距離を取るように一歩後ずさった。

「何だ？ お前は誰だ？ ここはどこだ？」

疑惑と戸惑いの視線を向ける霧に対して、女はまるで聞いていないかのように霧へと近づく。

そうして、霧にとつては青天の霹靂となる言葉を吐くのだ。

「ああ、私の坊や……！」

「な……！？」

咄嗟に抱き着かれた霧はしかし、見た目にそぐわない女の力に振りほどくこともできず、それ以前に、彼女が吐いた言葉の意味を必死に理解しようと努めた。

だが、霧には自分に抱き着く女を見たこともなければ名前を聞いたこともない。凜とした声は初めて聴くものであり、外見を見ずに

声だけを聞いたならば小学生かと勘違いしていたらうほどに、美しい。また、彼女の外見は声に負けず劣らずの容姿をしているように、胸元から自分を見上げてくる容貌はきつとこんな状況でなければそういうことに無頓着な霧であっても胸を高鳴らせていたことだろう。

— 先ず自分を害そうとしているわけではないと理解した霧は、女から視線を外して周囲を見た。すぐ傍には男と思われる二人の人物が膝を着いて頭を下げている。その向こう側、階段の下を見下ろすと、同じように膝を着いた人影が列をなして頭を下げていた。

いや、たった一人だけ、薄暗くてよく見えないが、その中でもたった一人だけ何故か逃げるようにして後ずさっているのが確認できたが、それがどんな顔をしているかまでは分からずじまいだった。

「……」

目の前の女性は未だ抱き着いたまま。近くにいる二人も頭を上げようとはしない。

—— どうしたものか。

その答えを出せる者がいるのならば今すぐここに現れてほしい、そう願う霧だった。

プロローグ（後書き）

小説家になろうでは初投稿になります。

拙い文章ですが少しでも時間つぶしに使っていただけると幸いです。

また、初めての投稿システムなのでわからないことだらけですが何か投稿ミスがありましたらその都度直していこうと思いますのでよろしく願いします。

一話

「おかーさん！」

そう叫んだ少年の声は、相手に届くことはなかった。何故なら、それを聞く相手の命は既にこの世から失われていたからだ。

少年には友人と呼べるものがいなかった。兄妹も居なければ父親も居なかった。その代りと言わんばかりに、常に母親が傍らに居てくれた記憶だけがある。どうして自分には周りの子供たちと同じ環境がないのだろうかという疑問は抱いたことがある。けれども、それに不満や寂しさを覚えたことはなかった。物心がついたときには既に母親と二人暮らしが当然の生活を送っていたし、周りと馴染めなくて悩んでいるときも母親が相談に乗ってくれていた。小学校に上がっても夜泣きが酷かった少年に、母親は何も言わずただ一緒に起きて夜を過ごしてくれた。

少年にとって、母親とはこの世で生きていく上で決して欠かせない存在だったのだ。

——なのに、真っ白な部屋の中でその母親は少年の声に耳を傾けてくれることはなかった。

ただ黙して目をつむり、静かに眠りについていただけだった。

「おかーさん！」

少年は叫び続けた。母親の体を揺すり、手を掴み、胸元に顔を押し付けて泣き叫んでも、しかし母親は何も返してはくれなかった。

そうして、唯一の保護者を失った少年は施設に入れられることになる。居るかも知れない親戚の顔は一度たりと見たことはなく、母親が居なくなっただけからは施設の先生たち、そして共に育った施設の子供たちだけが家族と言えたかもしれない。

けれど、少年は決して譲ることのない信念を持っていた。

そう——彼にとって、家族と呼ぶ人間は母親ただ一人であると。

✕ ✕ ✕ ✕ ✕

連れて行かれた部屋は、一言で言うなら簡素という言葉がそのまま当てはまるかのような場所だった。窓は等間隔で三つ設置されており、全て出窓の押し開くタイプになっている。入口から正面には大きめの丸型テーブルと、それを挟むように二つの椅子が置いてある。更に入口から見て右斜め正面、部屋の隅には一人用のシンプルなベッドが一つ置いてある。

部屋の中にあつたのはそれだけだ。

「ここが歴代魔王様が暮らしていた私室でございます」

女の後ろに控えていた一人の男がそう言った。霧はそれに反応することなく、ただ部屋の中をじっと眺めていた。

あれから……

霧は突然の状況にどうしたものかと悩んでいたが、自分から何か行動を起こすことはしなかった。一体何が起きたのか脳が理解に追いついていないというのもあつたし、抱き着いてきた女性は何もさせてくれなかったというのもある。結局、控えていた男の一人がその場を宥め、階段下にいた集団を解散させるまで霧はそのままの状態を維持していただけだった。

そうして何かを言いたげな女を説得し、一先ずということとで連れて行かれたのが男曰く『魔王の私室』だった。

とにかく、今は状況を整理することが一番の重点だと霧は考えた。しかし、一体どこから状況を整理していけばいいのか分からないのが問題でもあつた。部屋に連れてこられる間に、何を聞くべきか、自分はどうするべきかを悩みぬいた霧ではあつたが、部屋に着いてその中に入るころにはその悩みは解決していた。

これは従来、霧が持ち合わせている性格によるもので、彼はある一定以上の難しい問題があると流れに身を任せる癖があった。悩んでいても結論が出ないのであれば、悩むことを止めればいい。簡単に言って、霧は面倒くさいことが非常に嫌いであった。

自分はこれからどうなるのか、考えればキリがないが、考えなければ勝手に向こうが説明してくれることだろう。幸いなことに、男の一人は自分から説明係を請け負っている様子なので、こちらが何の反応も返さなければ勝手に色々と教えてくれるだろう。霧はそう考えていた。

「どうぞ魔王様、そちらの席にお座りください」

男が手で示したのはこの部屋にある二つだけの椅子の奥側だった。言われるがままに、霧が奥側にある椅子に座ると、女はその対面に座った。その後ろに男二人が並び立ち、霧を見た。不躰とも取れるその視線に若干の居心地の悪さを感じたものの、やはり霧は何も言うことはなかった。その視線よりも、正面に座る女性の熱い視線の方が煩わしかったのだ。

「それでは、魔王様……の前に、一つだけ確認を取らせていただきますのですがよろしいでしょうか？」

「……それは俺に言ってるのか？」

「はい、左様でございます」

男の一人——瘦躯に片眼鏡をかけた男は丁寧な仕草で頷いた。対して霧も頷きを返すと、男は満足したかのように微笑んで口を開いた。

「魔王様は、どこまでこちらの世界について覚えてらっしゃいますでしょうか？」

「は？」

思わず霧の口から洩れたのは、呆れだった。

「さて、何を言っている？」

「はい。ですから魔王様は——」

「その前に、その魔王様というのは何だ？ 何故俺のことを魔王な

どと呼ぶ？」

『……』

心底疑問の声を上げる霧を見て、何故か女は落胆の表情を浮かべ、片眼鏡の男は納得の頷きをし、もう一人の男は無表情を貫いていた。

「なるほど分かりました。魔王様はこちらの世界について何一つ覚えてらっしゃらない、ということとで相違ないでしょうか？」

「だから……ああ、もういい。そうだ」

色々と言い返したいことが湧き上がってきたが、ここで喚いても何の進展もないことを察して、霧は口を閉じた。

それから、少しの沈黙があった。その間に、霧は改めて自分と対面する三人を眺め見た。

先ず女だが、黄金色に輝く髪の毛を頭の後ろの辺りで纏めているが、それなりの長さを持つのか肩口にまで垂れている。肌の色は黄色人種に近いとも取れるが、どちらかと言えば欧米の白人の肌に近いようだった。非常に整った容姿をしていて、その瞳はハワイアンブルーのように澄んだ色をしている。

次に片眼鏡をかけた男。男の肌の色は淡い紫の色をしていて、霧はこんな肌の色をした人間をこれまで見たことがなかった。テレビで見る黒色人種の人たちはもつと真っ黒な肌の色をしていたが、この男の肌の色は少なくとも地球上では存在しないだろう。髪の毛は縮毛矯正をかけた髪の毛を後ろに流したようになっていて、非常にツンツンと尖っている。その鋭さはもしかしたら触れた途端に切れてしまうのではないかと思うほどだった。

最後に、最初から今までずっと無言を貫いている男。男は顔を除いた全身鎧を身に着けていて、腰には剣を下げている。非常に大柄な体をしていて、片眼鏡の男とは顔が三つから四つも身長が違う。首元に大きな傷跡があり、歴戦の猛者というものはこんなものだろうかと霧に思わせるほどだった。肌の色は霧と同じ黄色人種のように見える。

三人が三人、各々違う容姿と特徴を持っているものの、こちらに向けてくる視線には似たようなものを感じる。それを気のせいだと決めつけて、霧はこの無言の時間を打ち切ることにした。

「こちらからも聞きたいことがある、いいか？」

「……もちろんです、魔王様」

「まずそれだ。何故俺のことを魔王などと呼ぶ」

「それは……」

片眼鏡の男はちらりと女を見た。自分で説明した方がいいものかどうか悩んでいるのだろう。しばらく女が何も反応しないのを確認してから、男は丁寧な口調で喋りだした。

「こちらのことを覚えてらっしゃらないということ色々と疑問はございますでしょうが、まずは私どもの説明をお聞きください」

霧は黙って頷いた。

「では、先ず何故魔王様とお呼びするかについてですが……非常に簡単な答えです。貴方様はこの国の王、魔王だからです」

「……」

最初から言い返したいことを言ってくれる男に、しかし霧は黙って先を促す。質問をするのは後でも出来るからだ。

男の説明は続く。この国の名前、魔族という存在、そして、目の前の女性が自分の母親であるということ。

この国の名をギリウムというらしい。これは初代魔王がギリウムという名前だったことから由来する。次に魔族という存在。この世界には人間族と魔族、亜族の三種族が存在しているらしく、この国に居るのは全て魔族と少数の亜族とのことだった。魔族と亜族は人間族に比べると力が優れていたり、あるいは特殊な能力を使えたりするらしいが、あまりその辺りは詳しい説明がなかった。霧があまり興味を持っていない様子を見せたのがその理由であろう。

霧が説明の中で最も関心を向けたもの、それは目の前の女性が母親という点であった。

「母親……？」

「はい」

その説明を受けたとき、思わず霧は女性を凝視してしまった。眉根を寄せ、まるで睨みつけるかのような眼光を向けられた女性は、それでもどこか嬉しそうな感情を見せていた。

「魔王様の御名をマギー・G・エクスクワ様と申しまして、こちらに御座す方こそ、魔王様の母君であらせられるアミリア・エクスクワ様でございます」

その説明を受けて、少しばかり同様した自分が居たのを、霧ははっきりと確認した。霧のフルネームは浅間霧あさまきりという。その名前の部分である間霧とマギーの部分に類似を見たのもあるし、マギーという名前にどこか聞き覚えがあるのを感じたからだ。

——どうかしている。

霧は頭を振った。もしもマギーという名前に聞き覚えがあるのだとしても、それはきつとテレビが何かで聞いたに過ぎないはずだ。そうでないと、自分は本当に以前この世界に居たことになってしまふ。だが、それだけはないと霧は断言出来る。何故なら、霧は自分が過ごした二十年間の記憶を確かに持っているからだ。

「悪いが、人違いだ」

だから、霧はその事実をハッキリと言葉にした。

「俺にはここで生活した記憶などないし、マギー・ギリアムだったか？ そんな名前にも憶えがない。それに——」

意識して目に力を入れて、霧は女性を見た。

「——俺の母親はこの人ではない」

「——」

霧がそう口にした時の女性は途端に涙をこぼした。嗚咽を堪えるかのように手を口元に当て、俯いている。

「王妃様……」

片眼鏡がアミリアという女性を気遣うように声をかけるも、女性の嗚咽は強くなるばかりだった。

勘弁してほしい。それが霧の本音だった。一体何がどうなってこ

んな場所に連れてこられたか分からない上に、実は貴方は王様でした、そして目の前の女性は母親でしたなどと言われても納得も理解も出来るはずもない。

はあ、とため息を吐いて、霧は席を立った。

「帰してくれ。僕は魔王でもなければなんでもない、ただの人間だ」

「いえ、貴方様は紛れもない魔王様です。その証拠に」

ちらとアミリアを見て、男は言う。

「貴方様はここにいらっしゃる」

「なに？」

「魔王様をお呼びした召喚陣は、十年前に魔王様を別世界に転移したものを応用したものでして、その対象は魔王の血を引くものをこちらの世界に呼ぶというものです。その魔法を使った結果、現れたのは魔王様、貴方でした」

「……」

「魔方阵は七日の目をかけて綿密に作り上げたものであり、幾度も確認を重ねたのでミスはあり得ません。また、触媒にしたものも、魔王様の血と反応するように王妃様の血を使いました。それによって導き出されるのは、先代魔王と王妃様の血を引く者、つまり魔王様、貴方しか考えられないのですよ。貴方がここにいらっしゃる、それが貴方が魔王様であるという証明なのです」

それはつまり、どうあっても自分は魔王ということを受け入れなければならぬということなのだろうか。霧は思う。そんな馬鹿らしいことがあってたまるかと。それに、霧にはもう一つ、自分が魔王ではないという根拠があった。

「なるほど、その魔方阵が実際どんなものかは知らないが、そっちはそっちなりに俺が魔王だという根拠があるわけだ」

「はい」

「そっか……」小さく笑い、霧は言う。「ならばそれを否定する材料を与えようか」

「といたしますと？」

「まず一つ、魔族は人間よりも強い力を持っているといったな？」

「はい」

「それはつまり、肉体的にも普通の人間より強靱なものをもっている、そういうことだな？」

「もちろんでございます」

「ではこうしたらどうか？」

霧は石垣で作られた壁に向かってゆっくりと近づいた。一体何を
するのかという視線を向ける三人の前で、霧は思い切り壁を殴りつ
けた。

「――」

強い衝撃が拳に返ってくる。その後、鈍い痛みがじわりじわり
と拳全体に広がってきた。麻痺しているかのような感覚の中に、熱
い痛みが霧を襲った。

「――これで、どうだ？ これでもまだ俺は魔王とやらになるの
か？」

霧は血が滴る己の拳を見せつけるかのように顔の前へ掲げた。

「もしも俺が魔王というのなら、どうしてこの程度で傷を負う？」

それとも魔王というのはそんなに弱い存在なのか？」

「いえ……しかし……」

片眼鏡の男は答えに窮した。彼にとって、霧が魔王というのはも
はや確定的なのだ。魔方陣にミスがないとか、触媒に使ったのが母
親の血だからとかそんな理由ではない。彼の家は代々魔王に仕えて
きた一族だ。己が使えるのは魔王ただ一人だと妄信的なまでに信じ
てきたこの一族は、ある一つの秘術を己の血族に用いている。それ
は、魔王の血を認識する魔法だ。遙か昔、魔王の血を用いて作り出
したその魔法は、決して魔王の存在を間違えぬだけに作り上げられ
たものだ。無論、ここにいる片眼鏡の男の体にもその魔法は使用さ
れている。その秘術がいうのだ。目の前の男は魔王だと。

だが、確かに魔王であるならばこの程度で血を流すのは不自然だ

った。魔王の体とは例え鋭い刃物で切り付けても切り傷一つつかない強靱なものであるはずなのだ。

どうしたものか。悩む男は、自分の目の前に座る王妃の姿を見た。

王妃は先ほどの涙を堪えながら、ジッと霧の姿を見ていた。しばらく霧を見つめたままだったアミリアは、ハッとしたかと思うと、片眼鏡の男に命令した。

「坊やの手の治療を」

「はっ」

どうやら自分も相当動揺していたらしいと、片眼鏡の男は思った。魔王が怪我をしているのに、それをただ眺めているなどと、先祖に知られたらならば呪われる程度では済まないだろう。男は慌てて霧に近づくと、その手を取った。

「失礼致します」

「何を？」

「今治療を行います故」

そう言って、男は霧の血が溢れる手に、己の片手をかざした。突如淡い光が霧の手全体を包み込む。僅かに驚きの表情を浮かべながら、霧はその様子を黙って見ていた。光は数秒ほどするとだんだん弱くなり、最後には怪我をする前の霧の手がそこにはあった。

「これは……すごいな」

自分の手をひっくり返しながら全体を見る。そこには流れた血の跡はあっても、傷の形跡は見当たらない。

「ありがとうございます」

「ライ、ライ・ノライと申します。ライとお呼びいただければ幸いです魔王様」

「そうか。すまないライ。だが、俺は魔王ではないと、今証明されただろう？」

「それは……」

困ったようにライはアミリアに振り返った。するとどうだろうか、

アミリアは先ほどの悲しみの表情はどこかに忘れたかのように呆然とした顔をしている。

「王妃様、如何されましたでしょうか？」

「……いえ。ただ、今ので一つ思い出したのですよ、ライ」

「それは……？」

「少し、いいですか？」

アミリアは霧の傍によると、先ほどまでライが掴んでいた手を取った。

「何をする」

咄嗟に振りほどこうとした霧の手を、アミリアは両手で掴む。

「すぐ終わります。少しの間だけ、こうすることを許してくれますか？ 坊や」

「……少しだけだな？」

「ええ」

アミリアは霧の手を両手で掴んだまま、自分の額をそこに当てる様にして俯いた。そのまま呟くかのようにして、何かを口に行っている。それが何なのか霧にはまるで分からなかった。もしかしたら先ほどライが使ったような魔法を唱えているのかも知れないが、それならそれで霧にはどんな魔法を使おうとしてしているのか理解できるはずもなかった。

しばらくまるで念仏のように聞こえるアミリアの声を聴きながら、霧はこれからのことを考えていた。もし自分が魔王ではないと認められたとして、果たしてこの人たちは自分を元の場所に帰してくれるのだろうかということ。まかり間違つて殺されるということはないと信じたいが、果たして王の一族であるような人たちにこれだけ無礼な物言いをしたのだ、確実に帰れるという確証はない。その場合は何とかしてこの場から脱出し生きていかなければならないのだろうか……

「坊や、少しだけ、お話をいいですか？」

「……何だ」

「今から十年前、坊やがまだ小さく、そして、異世界へと旅立った日のことです」

アミリアは滔滔と語る。

「ある日、私と陛下は他国へと出向いていました。とあるパーティーに出席するためです。楽しいパーティーでした。陛下が居て、私が居て、坊やがいる。平和で、安穩としていて、きらびやかに感じる日でした。そうして私たちは帰宅の途についていました。坊やははしゃぎ疲れて眠ってしまい、私もうつらうつらとしていた時のことです。突然陛下が馬車を止められました。何かあったのかと思う私に、陛下は言われました」

そこで一息を吐くと、アミリアは顔を上げた。

「『息子を頼む』と、そう仰られたのですよ。陛下の真意を理解できない私でしたが、次の瞬間、陛下は倒れました。何の前触れもなく、馬車の中に倒れられた陛下は、そのまま息を引き取られました……寿命だったのです。魔王というものは皆総じて強大な力を持つと同時に、その生涯はひどく短いのが特徴なのです」

説明は続く。

「国に帰った私は、先ず何をしなければならなかったかと考えました。国のこと、自分のこと、そして……坊やのこと。坊やはまだ幼かったから、魔王の血を継いでいても、その力を行使する方法を知らなかったのです。私は考えました。魔王が死んだという情報は隠しきれるものではない。だとしたら、このままではまだ幼い坊やの命も危ない、と。だから、私は急ぎ違う世界への扉を開き、そこに送りました」そう、とアミリアは力強く言った。「坊や、貴方を」

「なに……？」

「その時に、向こうの世界で不自由がないようにと、私は坊やにある魔法を施しました。それは、こちらの世界のことを一時的に忘れさせる魔法です」

「……」

「私の名前はアミリア・エクスクワ。幻の使い手。そして今、貴

方の中に封じられた記憶を開錠しましょう」

突如、霧の意識を襲うものがあつた。水の中に身を浸したかのような柔らかな何かが、頭を、肩を、腕を、全身を包み込んでいく。

「あ……」

それが足元まで達した時、霧は落ちていく自分を支えることが出来なかった。

一話（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

二話

ガタン、ゴトンと揺れている。まるで電車のようにも聞こえるその音は、しかし電車の線路の音ほど鋭くはなかった。聞いたことがない音なのに、自分はこの音を知っている。なんだったか、と思うと映像が浮かんできた。ゆったりと流れていく景色は美しいもので、少なくとも日本という国では見ることは叶わないものだった。広大な草原があり、鬱蒼と茂る森林があり、遠くには巨大な獣の姿があった。

と、その時突然体が浮かび上がった。腋に感じる僅かな痛みは、自分が持ち上げられたのを教えてくれた。そのまま自分は外の景色の見える窓から離され、柔らかい感触のする場所に座らされた。お尻も、背中も、柔らかい。振り返ってみると、そこでは母上が自分をみて微笑んでいた。正面を見ると、父上が自分を見ていた。どうして自分が見られているのか分からなくて、取り敢えず幼い自分は笑ってみた。それをみた父上は僅かに頬を上げ、母上は頭を撫でてくれた。

場面は変わる。

巨大という言葉では足りないほどの大樹があった。自分と父上はその前に立ち、樹の話を聞いていた。樹が言うには、森を荒らす魔獣が居るのでそれを退治してほしいとのことだった。父上は頷いてからその魔獣を退治しにいった。自分は父上が魔獣を退治する様を、少し離れたところから見ていた。一つ目で二足歩行をするその魔獣は恐ろしかったけれど、父上はそんな脅威を前にしても何の恐れも抱いていなかった。殴りつけられても、噛みつかれても、父上は黙ってなすがままになっていて、魔獣がとうとう何もしなくなつたときに、少しだけ動いた。少なくとも自分の目には少し動いたようにしか見えなかったけれど、その僅かな動きで、魔獣の体は吹き飛んでいた。父上というのはすごいんだなあと幼いながらに思っ

た瞬間だった。

場面は変わる。

目の前では母上が泣きながら何かを言っている。自分は魔方阵の光が発する結界に遮られて、母上が何を言っているのかまるで聞こえなかった。外に出ようとしても、結界が邪魔をしてそれ以上前には進めなかった。母上、と呼んでも、母上はただ泣いているばかりでこの結界を壊すことはしてくれなかった。不思議なことに、自分はいくつかから母親と別離しようとしているのだなと理解していた。それは嫌だとも思ったが、自分にはどうすることも出来なかった。何故なら、この結界を壊すほどの力を自分は持っていなかったのだから。

母上は泣いていた。自分も、泣いていた。そして、自分は違う世界へと旅立ったのだ。

✱ ✱ ✱ ✱ ✱

目覚めは突然だった。ぼやけた視界と頭でゆっくりと覚醒するのとは違い、暗闇から一瞬で明るみへと意識が移る、そんな目覚めだった。

見覚えのない天井だと思った。石垣で出来た天井は、何だか陰気くさい空気を漂わせていたが、見ているうちに段々と趣のある景色にも見えてきた。年よりの家に入ったときに感じる、あの雰囲気似ていると霧は思った。最初はただ古臭いとしか感じられないのに、そこに居ると歴史の積み重ねを感じさせてくる、あの空気だ。

霧は体を起こした。そこでようやく、自分がベッドの上で寝ていることに気が付いた。同時に、ここが魔王の私室と呼ばれている場

所だということも思い出した。自分とアミリアという女性が座っていた椅子には今は誰も座っておらず、部屋の中にも霧以外の人影は存在しなかった。

どれほど寝ていたのか、窓から入るのは陽光ではなく夜闇がもたらず暗闇だけだった。その代りに、部屋の中にはぼんやりとした明かりがつけられている。ロウソクかとも思ったが、すぐさまそうではないと気づく。部屋の四隅、そしてその点と点の間に数個、明かりは存在していた。それは何かを燃やして出来る明かりではなく、光そのものが光を発しているという、霧自身よくわからないものだった。けれど光は確かに光として存在し、この部屋の中を照らしてくれている。

霧はベッドから降りた。ベッド脇に置いてあった靴を履き、窓辺まで近づく。出窓の向こうに見えるのは暗闇の中に浮かぶ光点だった。何となくは気づいていたが、ここはきつと魔王が住むためにつくられた城なのだろう。そして眼下に見えるのはその城下街だろうか。光点は結構な距離を持って向こう側まで続いている。まるで祭りのような景色を独り占め出来るのはここが魔王の私室だからだろうか、などと霧はどうでもいいことを考えた。

窓から離れて、少しばかり部屋の中を歩いてみた。何があるわけでもない部屋の中は、やはりパツと見ただけでは陰気な空気を漂わせている。だというのに、どうしてだろうか、霧はこの空気が嫌いではなかった。馴染む、とでも言えがいいのだろうか。自分はここ of 空気を知っていて、ここに居るのが当たり前なのだという気になっってしまう。

霧はこれと同じ経験を何度かしていた。それは旅行から帰った時に感じるものだ。修学旅行などで県外に出ると、新鮮さと同時にどこか疎外感のようなものを感じる。それはきつと間違いではなく、ただの旅行者でしかない自分に行く街の中で余所者でしかないのだ。そう感じるからこそ、地元に帰ってきたときの、おかえりと言われているかのような空気を心地よく思うのだろう。

霧がこの部屋に感じているのはそういった空気だった。

「……はは」

霧は笑った。この部屋にそう感じてしまっている自分に対して。その事実の不自然さを感じていない自分に、堪えられないものを感じた。

霧は先ほど自分が見ていた夢を覚えていた。まるで明晰夢のように鮮明に映す出されたそれらは、霧が知っているものだったのだ。

「ははは」

右の掌で両目を覆い、椅子に座った。

夢で見た光景なんて、この二十年間で一度たりと見たことはない。それは断言できる。霧は確かに二十年を現代の地球は日本で育ったはずなのだから。

だが、ならばなぜ、あの光景を知っていると思ったのか。霧は眠りにつく前に、アミリアが言った言葉を思い出す。

『私の名前はアミリア・エクスクワ。幻の使い手。そして今、貴方の中に封じられた記憶を開錠しましょう』

アミリアはそう言った。ならば、あの夢は今まで封印されていた自分の記憶とでもいうのだろうか。

——分からない。

それが今の霧に出せる結論だった。

いっそのこと彼らが言うようにここで魔王というものをやるのもいいのかもしれないとまで思い始めた。思うだけで決して実行に移そうとはしないが、そんな戯言を考えてしまっくらいに、今の霧は参っていた。

✱ ✱ ✱ ✱ ✱

魔王の私室とほぼ同じつくりをした部屋の中に、三人は居た。

「それで……魔王様の記憶は元に戻られるのでしょうか？」

「それは分かりません」

ライの質問に、アミリアは首を振って答える。主観だけで答えるならば、まず間違いなく戻っているというのがアミリアの思いだった。霧に施していた魔法はあくまでも一時的に違う記憶を認識させるというものなので、そもそも時間さえ経てば解けてしまっていてもおかしくないものだ。それが今日まで継続こんにちしていることが驚きののだ。

ほうと溜息を吐く。アミリアの予定では、自分の息子はこちらに戻ってきたときには既に記憶を取り戻していて、早ければ数日後にでも魔王即位の報を各地に飛ばすつもりだったのだ。それが呼び戻してみれば何故か肉体は人間程度に落ち、記憶は戻っていない。どうしてこんなことになっているのか、もしかしたら向こうの世界で何かあったのかと憶測を立てることもできるが、それは所詮想像の範疇を出ることではない。

「とにかく、今は坊やが記憶を取り戻してくれていることを祈って待つしかありませんね……ライ、坊やはまだ眠りからは？」

「は。部屋の前に待機させている近衛兵からは何の連絡も来ておりません故、まだ眠りに着かれているものかと」

「そうですか……」

一度目を閉じてから、アミリアは何気ない動作で部屋の中を見回した。元々装飾品を好まない魔王は、部屋に必要以上のものを置くとはしなかった。無論、夫を差し置いて妻である自分が装飾品類を過度に集めるわけにもいかず、アミリアの部屋は魔王の私室と同じように、侘しさすら感じる様相を醸し出している。

それでも、十年前まではこんな部屋でも明るい空気を発していたころも確かにあったのだ。遠い昔のように感じる記憶は、今では自分ひとりしか忍ぶ者はいない。けれども、霧が記憶を取り戻してさ

えくれば、アミリアの悩みは一つ解決するのだ。アミリアは今亡き魔王に、どうか記憶が戻りますようにと祈った。

「それで……王妃さま、魔王様のことですが……今後は如何いたしましうか。もし記憶が戻ったとしてですが、何故か魔王様はその力のほとんどを使えないご様子。もしもこのままですと……数ヶ月後に行われる舞踏祭で……それに、記憶が戻らなかった場合の対処についても考えておかなばならないかと」

「ええ……そうですね……」

そう、もし霧が記憶を取り戻したとしても、使えない力についてどうにかすることも視野に入れておかなければならない。

「カコ、もしも坊やの力がしばらく戻らない場合、貴方にその件について託すことになりそうですが、大丈夫ですか？」

この場に居るもう一人の男——カコ・イクォールはその言葉に、初めて口を開いた。

「無論でございます」

それだけを言って、カコは静かに目を閉じた。魔王を護るためだけに存在する近衛隊の隊長である彼は、自分の使命を全うする以外の時はあまり口を開かない。それはアミリアも分かっているのか、それ以上を求めようとはしない。

「それと王妃様……もう一つ懸念するべきことがあるかと」

「ええ、分かっています。坊やが向こうの世界に戻りたいと言った場合でしょう？」

「はい……その場合、どう申されるおつもりで」

「……」

アミリアは返答に窮した。たった一人の我が子とようやく再会を果たしたのだ、どこにその息子を手放したいと思う母がいるものかだが、霧が取る選択肢の中で最も可能性の高いのが「元の世界に帰してくれ」とこちらに要求してくるものだ。記憶が戻ればそんなことはない、と信じたいが、自分たちが知らない生活を霧は十年もの間向こうで送っているのだ。友が出来ただろうし、恋人と呼べる相

手もいるかもしれない。そうなった場合、やはり霧は戻りたいというだろう。

アミリア達にとって最も理想と言える状況は、このまま霧が記憶を取り戻し、魔王の力を取り戻し、この国に君臨してくれることなのだ。どうにかしてその方向にもっていかなければならないのだが

……

「今は……何とも申し上げられませんが。まずは坊やが記憶を取り戻してくれることを祈るしか……」

とうとう、アミリアは答えを返すことはなかった。とにかく霧がどんな状態にあるのかを把握してからでないと、今後の行動の指針すらたてられないのが現状なのだ。

しばらくそのまま黙り込んでいたアミリアは、ふと気づいたように顔を上げて立ち上がった。

「王妃様？」

「いえ……坊やが起きたような気がしたので、少し様子を見てこようかと」

「なるほど、それではお供させていただきます」

「ええ」

アミリアの後ろに、ライは続く。カコも黙ってその後ろを着いて行った。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

突然響いたノックの音に、テーブルの上に突っ伏していた霧は顔を上げた。一体誰が、と思うも、ここに訪れる存在に心当たりはあの三人しか思い浮かばなかった。返事をするべきか、と逡巡するも、

今顔を合わせて何を話せばいいのか分からない霧は、そのまま無言で扉を見つめた。

それから二度、三度とノックの音が響いたが、それを全て霧は無視することにした。もう少し考える時間が欲しかったのだ。

だが、状況は霧の都合のいいようには進んでくれないらしい。しばらくノックの音がしなくなったかと思うと、「入りますよ」という言葉の後に、ゆっくりと扉は開いていく。

扉の向こうから顔を覗かせたのは、やはりアミリアという女と、ライという男ともう一人仏頂面の男だった。

「……」

「……」

アミリアは返事のなかったのに霧が起きていることに驚いたのか、室内に入ってから目を見開いたが、そのままゆっくりとテーブルへと近づいた。

「起きていたのですね」

「ああ……いつ自分が寝たのかすら分からなかったがな」

皮肉とも取れる霧の言葉に、アミリアは困ったように笑いながら椅子に座った。その後ろには気絶する前と同じように、二人の男が控えている。

「それで、何の用だ？」

分かりきっている質問を、霧はあえて口にした。

「……坊や、記憶は戻ったのですか……？」

予想通り、アミリアの口から出てきたのはそんな質問だった。

霧は悩んだ。先ほど見た夢の内容をそのまま話すべきか。その場合自分はそのまま魔王というものに成らせられる可能性が高い。それは現状、霧にとってあまり望ましくない展開だ。だが、だからといってあの夢の内容全てを否定するには自分はその夢を現実にあつたことだと感じ過ぎている。

どう答えたものか悩んだ末に、霧は逆に質問を返すことにした。「その前にいくつか聞きたいことがある、いいか？」

「ええ、私に答えられることならばなんなりと」

「では一つ。あんたは幻の使い手と自分で言っていたな？」

「はい」

「それはつまり、現実にないことでも“そうあったこと”のように認識させることが出来るということか？」

「それは……」

アミリアにとってそれは答えづらいものだった。何故なら、霧の言う通り、彼女の力をもってすれば現実になかった状況をそうであったかのように認識させることが出来るからだ。だからといって、ここで素直に頷いてしまうのはよくない状況を生み出すとアミリアは確信していた。

こんな質問をしてくるということは、霧はきつと記憶の一端なりを思い出したに違いなかった。でないと、そんな点が気になるわけがないのだから。

かといって、息子に嘘を吐けるほど、温い愛情を持ち合わせていないアミリアは敢えて濁した答えを返した。

「状況によっては、そういうことも可能です」

「状況によつては？ それはどんな状況だ？」

「そうですね。じつくりと時間を置いた状況下であれば、落ち着いて魔法を行使することが出来るので可能になります」

「……」

霧は考える。先ほど自分が気絶する前の状況は落ち着いていて魔法とやらを使えたはずだ。となると、やはりあの夢はこの女の使った魔法で錯覚しているだけか……

「……」

だが、どうしてもあの夢が錯覚であるとは考えにくい霧は、質問を続ける。

「次の質問だ。その魔法は……何と云えばいいのか。そうだな、例えばある男がこの世に存在すると錯覚させるとする。その男の肌の色、行動、声、それら全てをあんたが指定することは出来るか？」

「それは……その男を、私が見聞きしたことがあるのであれば、可能です」

その言葉を聞いて、霧はかかったと思った。つまり、アミリアが見たことがある存在ならばその人物が居たと錯覚させられる。あの夢の中に出てきた魔王らしき男の存在も、霧の中に見たことがあると錯覚させることも可能だということだ。

王手をかけた気分のまま、霧は最後の質問をした。

「では聞くが、魔王とやらは俺と同じ肌の色をしていて、身長はこの男」

と、カコを指さして霧は言う。

「その男とほぼ同じ身長をしていて、髪は俺と同じ感じで間違いはないか？」

『おお……』

途端、アミリアとライは口を揃えて声を出した。それは霧が記憶を取り戻したという喜びの声だったのだろう。

しかし、続いた霧の言葉に二人は閉口することとなる。

「だが——それは、あんたが俺にそう錯覚させた、ともいえるわけだ」

「そんなことは——」

「——ない、とは言い切れないだろう？」

そう、たった今、霧の質問に答えたのはアミリア本人だ。違うとは言えるわけもない。アミリアも、こうなるのは途中から感じていたことだったが、それでも彼女は我が子に嘘を吐くことだけはできなかった。返す言葉もないまま、アミリアは俯き、ライはそんな女を後ろから見つめていた。

「ふん……何とでも出来るよな。確かに俺は見たさ。あんたと、その先代魔王とやらと一緒に馬車に乗っている光景を。巨大な樹と話している魔王と僕の光景を。魔方陣の中からあんたの泣き顔を——」

「ちょっと待ってください」

突然、喋る霧の言葉を、アミリアが遮った。

「なんだ？ まだ言い訳があるのか？」

「今、巨大な樹と話していると言いましたか？」

「ああ、言ったがそれが何か——」

あるのか。そう言おうと思った霧の言葉は続くライの言葉にかき消された。

「——ありえない」

「なに？」

「巨大な樹とは……それは、もしや契約の森の主では？」

「契約の森？」

「はい……」

ライの説明曰く、その森は魔王とその血を引く者しか立ち入りできない聖域だとのことだ。

それはつまり——魔王の血を引いていないアミリアではその森の光景を見ることは出来ないということだ。

「あ——」

そこに至り、霧は思い出す。あの光景の中には、アミリアという女性の存在はどこにもなかったということ。

そこから導き出される答えは——

「そんな馬鹿な……」

ガタンと音を立てて、立ち上がる。同じように、対面に座っていたアミリアも両手を口に当てて立ち上がった。

「おお……坊や……」

「魔王様……」

アミリアの、ライの声がどこか遠くに聞こえる。

霧は認めざるを得なかった——自分は、この世界の住人であると。

二話（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

三話

浅間霧という人間は、いつの頃からか何事においても全力で取り組むというのを忘れた存在だった。

褒められる、賞を取る、結果を残すといったものに何の価値も見出していない。それらを得たからといって、得る前と何が違うのかという疑問を心の底から抱いていた。人というのは所詮何かをしたからといってその本人に何か変化をもたらすこともない。個人は個人であり、それ以上でもそれ以下でもありはしないのだと、霧は常々思っていた。

だからというわけでもないが、霧は物事に真剣に取り組むということをした記憶がなかった。幼いころまでは記憶にないが、少なくとも中学校に上がった頃には惰性で生きる浅間霧という一人の人間が出来上がっていた。

期待などというものは自分には関係なく、努力という言葉とは无缘であり、精神論などというものはゴミ箱に捨ててきた。

——だからこそ、自分が魔王であるという自覚を持つことは、かつてないほどの困難であった。

✱ ✱ ✱ ✱ ✱

朝がやって来た。室内に灯されていた光はいつの間にか消え去り、代わりに眩いばかりの太陽光が室内に侵入してきている。魔族が住む国にも朝日はあるのだなと茫洋とした気持ちで霧は思った。

昨日の小さな会談は、霧の「考える時間が欲しい」という一言に

よって一先ずの解散を迎えていた。霧は三人と別れてから、ベッドの上に座り込み、一晚を過ごした。眠りにはついていない。霧は座り込んだまま、思案に暮れて夜を過ごした。

何か解決したということとはなかった。ただ、自分が過ごしてきたこの二十年のどこまでが本物で、どこまでが偽物なのかを判断しようとした。記憶の蓋が外れたのか、次々に浮かんでくる見たことのない記憶を脳裏で眺めていたり。自分はこれからどうするべきなのかと先行きの見えない悩みを抱えたり。そのどれらも霧の肩に重荷を載せるだけで、何かしらの答えを導き出してくれることはなかった。

それでも、誰にも会わず一晚悩んだお陰か、気持ちを落ち着かせることには成功していた。それが“考えてもどうしようもない状況にいる”のだという答えからくるものだとしても、霧は構わなかった。自分が冷静さを取り戻した、それが何よりも大事なのだから。

「……はあ」

肺の中にたまったものを吐き出すかのようなため息。

「まあ……取り敢えずは色々聞いてみないとどうしようもないよなあ」

誰に聞かせるでもない独り言は、朝の空気の中に消えていく。霧はベッドから降りて、窓へと近づいた。窓外では、昨日暗くてはつきりと見ることの出来なかった城下街が広がっていた。まだ朝も早いだろうに、広い街路を、馬車や多くの人々が行き交っている。家は総じて木か石造りで出来ており、見たことはないがヨーロッパなどの住宅街はこんなものだろうかと霧に思わせる。それにしても木で出来た家が日本風の趣を醸し出しているが、そもそも国々の様相の違いなど霧には分からなかった。この国がどんな発展の仕方をしているのか予想を立てることも出来ない。

霧は両開きの出窓を開いた。突如侵入してくる朝の空気は冷たく、薄らばんやりとしていた霧の頭をすっきりとさせてくれる。大きく深呼吸をすると、腹の底にたまっていた何かが抜けていくような気

すらしてくる。

日はのぼり、人々は動き出す。霧も、動き出す。
浅間霧の異世界生活の初日は、こうして始まった。

✽ ✽ ✽ ✽ ✽

コンコンというノックの音がした。昨日とは少し音の大きさが違うノックに、アミリアではないなと思いながら、霧は返事をした。

「失礼いたします。魔王様の朝食をお持ちいたしました」

ゆつくりと開かれた扉の向こうに、メイド服に身を包んだ女性が三人、各々両手に皿を持って立っていた。既に椅子に座っていた霧は持ってこられたその皿の量に思わず目を見開いた。どう考えても一人分の食事の量とは思えなかったからだ。

「失礼いたします」

そう言いながら、メイド三人は小さなテーブルいっばいに皿を並べていく。

「一つ聞くんが」

「はい、なんでもございましょう」

「これが魔王の通常の朝食なのか……？」

もしや魔王というのは大食感だったのだろうかと不安になる。もしそうなのであれば、自分とそんな化け物を一緒にされても困るからだ。

「いえ、こちらは王妃様のご指示によるものです」

「王妃の指示？」

「はい。朝食は魔王様とご一緒されると伺っております」

「……」

少なくとも、霧はそんな話は一言も聞いていない。それに、一緒にとるとしても、その本人がここに居ないではないか。

そう思っていたら、開いたままの扉からアミリアが姿を見せた。

「おはよう、坊や。昨夜はゆっくり眠れましたか？」

「ああ……まあ少しはな」

何だか素直に言うのが癪にさわったので、敢えてぼかして返答をする。対照的にアミリアのほうはぐっすり眠りに着くことが出来たのか、その顔色は悪くないように見える。とはいえ、女性というものは化粧で多少の疲れならば隠すことが出来るとはテレビから得た知識だった。見た目通り彼女が眠りに着いていたのかどうかは霧の知るところではなかった。

「それで、どういっつもりだ？ わざわざここに食事を持ってこさせて」

「母と子が食事を取るのに何か理由が必要でしょうか？」

「……」

正論だった。半ば自分がこの国で生活していて、目の前の女性の息子であるのではないか、という思いも抱いているために、強く否定することは出来ない。

「それに、本来であれば食堂で食事を取る所を、坊やが気を使っただけでいいないここに料理を持ってこさせましたが、お嫌でしたか？」

「いや……ここで構わない」

なるほど、確かに王族なのであれば専用の食堂があるのだろう。

霧はテレビの中の世界でしか見たことのない、巨大なテーブルで二人だけで食事している光景を想像し、頭を振った。

「一晩経って坊やも色々聞きたいことは出てきたでしょうけれど……先ずは食事に致しましょう？」

「ああ、分かった」

確かに体は空腹を訴えている。霧は素直に頷いた。

改めて料理を見ると、いつもこういうのか、はたまた自分がここに

居るからなのか、朝からにしては豪勢にも過ぎる光景があった。鳥のソテーも、肉厚のステーキも、更に言うならばワインのようなものも朝から胃に入りたいとは思えないが、仕方なく霧はナイフとフォークを手に取った。胃がもたれない程度に食べれば問題はないだろう。

「……」

「……」

静かな時間が流れる。アミリアも、霧も、料理を口に運ぶだけで何も言葉にしようとはしない。アミリアはマナーの点でそうなのかもしれないが、霧は単純に何から聞こうか悩んでの沈黙だった。

何を聞こうか。何を聞けばいい？ そんなことばかりが頭をよぎる。

自分はどうしたいのか、どうすればいいのか？ 徹宵して考えたことが再び浮かび上がってくる。

料理は非常に美味しかったような気がしたが、考え事の所為で霧はあまり味を覚えていなかった。

二人では食べきれない料理は結局三分の一を残して終了となった。霧は黙ってナイフを置き、それを見たアミリアはメイドに下げるよう指示を出した。

テーブルの上には水差しと二人分のコップだけが残っている。霧は自分のコップを口に運びながら、これからの展開を考えていた。

と、どう切り出したものか霧が考えていると、先にアミリアの方から切り出してきた。

「それで」霧の目を真っ直ぐに見つめて、アミリアは言う。「この国のことはどこまで思い出すことが出来ましたか？」

「……どこまでと言われると、返答に困るが」

一拍の間をおいて、霧は喋りだした。

「物心がついてから、先代の魔王と思われる男と、あんたと一緒に過ごしている記憶は覚えている限りは思い出したんじゃないかと思う」

それを聞いて、アミリアは嬉しそうに目じりを下げた。

そんなアミリアに、「だが、」といって霧は続ける。

「この記憶がどこまで本物で、どこまで信用できるのか、正直俺には判断がつかない。ただ、浮かんでくる映像を見て、俺自身は確かに知っているとは思った。昨日の会話で、これがあんたの作り出した幻覚ではないというのも……まあ、分かった」

その上で、と霧は言う。

「あんた達は俺をどうしたいんだ？ 昨日ライという男が言っていたようにこの国で魔王とやらをやれば満足なのか？」

「……」

アミリアは答えない。それでも、昨日の沈痛な表情とは違つ、確かな喜色が表情に表れているのを、霧は感じ取った。

「そうですね……先ず、坊やにはこの国の現状から教える必要がありますね」

「……」

「少し長くなりますが……」

そう前置いて、アミリアの説明は始まった。

まず、魔族というものは魔族領という範囲で暮らしているという。魔族領には六つの国があり、魔王が君臨しているのは領土の真ん中にあるギリアムという国に当たる。ギリアム以外の国々の頂点にはそれぞれ辺境伯やら公爵やらを名乗って統治しているとのことだ。

本来、魔王とは血脈によって受け継がれるのが現在の慣習になっているらしい。魔王の力は血によってのみ受け継がれるのが確認されているからで、それがいつの間にか慣習になっていたとのこと。

だが、現在は魔王の席が空位になっており、これまでは王妃であるアミリアが状況を説明して——次期魔王である霧が存在し、それが十年後に戻ってくると——事なきを得ていたらしいのだが……

「武闘祭……？」

「ええ」

なんでも数年に一度、魔族の力を高めるためという名目で、各国

家の代表と、自由参加の者たちが集まって所謂腕試しをするらしい。これまで十年ものあいだ魔王が空位になったことはなかったのも、次期魔王が現れたのを大々的に公表するためにも、その大会に出て優勝してもらいたい、というのがアミリアの言い分だった。

「……本気で言っているのか？ 昨日見せただろう、俺の肉体はただの人間と変わりないんだぞ？」

アミリアの説明に、霧は食って掛かった。記憶が戻ったとはいえ、霧の体は今もただの人間にすぎない。そんな状態で猛者が集うであろう大会に出ても、結果は火を見るよりも明らかだろう。

「ええ……その点についてですが恐らく長い間魔王として、魔族としての生活を送ってなかったことから、単純に力の使い方を忘れているだろうというのが私たちの見解です。なので、坊やには力の使い方を取り戻してもらい……」

「待て、待てくれ」

思わず霧は言葉を遮った。

「その前に、俺はどうしても魔王とやらにならなければならないのか？」

それは、霧が一番聞きたかったことだった。霧にとって一番都合のいい流れは、元の世界に戻してもらって、平穏無事な生活を送ることなのだ。向こうとしてはそうなるのは困るのだろうが、霧としては自分の身の安全を確保するのが最優先事項なのだ。だが、反面、アミリア達が自分を元の世界に戻してくれるかどうかについては、不可能だろうと霧は考えていた。向こうにとって一番の流れは、自分が魔王として君臨することなのだろうから。

「……」

案の定、アミリアはただ困った顔を向けてくるだけで、返事をしようとはしない。それが、霧を元の世界に戻す気はないのだという何よりの証に見えた。それでも、ただ黙って成り行き任せにしている、きつと自分は魔王とやらにさせられてしまふ。だから、霧は思い切って聞いてみた。

「なあ、俺を元の世界に戻すことは可能なのか——？」

「……」

アミリアは答えない。それが聞かれることが予測出来ていた質問であつたとしても、返答を準備しておくことが出来なかつたからだ。率直に言つてしまえば、可能“だろう”というのがアミリアの考えだつた。絶対に出来るとは言えない上に、現段階では魔力の補充が出来ていないので、限りなく不可能である、というのがアミリアの答えだ。だが、それを答えてしまつていいものかどうか。彼女にとつて、霧という存在は最後の肉親に当たる。可愛い我が子が魔王になりたくないというのであれば、それもやむを得ないのかとすら考えている。けれど、もしそうなつた場合、ギリアムという国には違う魔王が君臨することになるだろう。

どう答えればよいのか、悩むアミリアを見て、霧はやはりという気持ちを抑えきれなかつた。戻せないわけではない。何故なら、一度霧はこの世界から地球という世界に送られていたのだから。ここで返答をしないのは、送りたくないという思惑があるからだろう。けれど、それは最終的に地球に送ることは出来ないという結果でもある。

どうあつても、自分は元の世界に帰ることは出来なさそうだと、いう諦めにも似た気持ちを霧は抱いた。それは従来面倒くさがりが顔を出したのだらう。けれど、仮にもしこの国で生活を余儀なくされたとしても、魔王とやらになるのだけは拒否しなければならぬ。

——だって、自分はそんな立派な存在ではないのだから。

「分かつた、もう答えなくていい。この国で生きろというならそれに従おう……」

アミリアは咄嗟に晴れた表情を浮かべた。そんな、自分の母親である相手にも心を痛めながら、霧は言う。

「力の使い方とやらも、忘れていただけならば習おう。自分の身を守るくらい力が俺の血に流れているというのならそれに従おう」

う。ただし——俺は魔王という柄じゃない」

「そんなことは——」

ない。アミリアがそういう前に、霧は手を挙げて遮った。

「あなたがどんな風に見てくれているのかは知らない。けれど、俺は十年の歳月を違う世界で暮らしていたんだ。こっこの世界で俺が十年暮らしていたとしても、それと同じだけ、向こうで俺は生活していたんだ。俺のことは俺がよく知っている。その俺が言おう……俺は、魔王なんて高尚なものに着ける存在じゃない」

話は終わりだと言わんばかりに、霧は席を立ち、アミリアに背を向けて窓辺に近づいた。そのまま眼下を見下ろして、人々の流れを眺め見る。

背後で、アミリアが立ち上がる気配がした。そのまま彼女は霧のすぐ後ろまで近づいた。霧もそれを感じているが、振り返ろうとはしなかった。

——突然、抱きしめられた。霧は驚きに一瞬体を硬直させるが、抵抗しようとは思わなかった。

「……わかりました」

長い長い沈黙の後に、アミリアはそう言葉にした。

「坊やが魔王になりたくないというのであれば……私はそれに従いましょう……ただし、一つだけ、一つだけ、お願いがあるのです」

「……なんだ」

それは、十年という歳月を一人で耐えた母親の心からの嘆願だったのだろう。その言葉を聞いた瞬間、霧は静かに頷く自分を感じていた。

「私のことを、昔のように、母上と呼んでくれますか……？」

「……」

言葉はなかった。静かな頷きを返しただけだったが、アミリアには伝わったのだろう。背中違う熱を感じた。それはきつと、自分の母親の涙だろうことは、振り返るまでもなく分かっていた。

その涙が何の意味をもつのか。霧には分からなかった。分からない

かったが、その涙は、この女性が自分の母親であるということを確認する何よりの証拠なのではないかと、霧はそう思っていた。

✱ ✱ ✱ ✱ ✱

そんな母子の様子を、扉の向こうから透視している男が居た。ライ・ノライ。魔王の御側付きである男は、その様子をただじっと眺めていた。

「どうだ？」

ライの隣では、透視能力を持たないカコ・イクォールがその様子を眺めていた。普段無口なこの男でも、中でどんな状況が繰り広げられているかは気になるようだった。

「……あまりよろしい状況とは言えませんが」

「……というところ」

「魔王様は魔王となることを拒否されました」

「……」

それが、どういう意味を持つのか、分からないカコではなかった。

「王妃様はなんと……？」

「さて、ね……」

透視というプライバシーの侵害甚だしい能力を用いながら、ライは中での状況をカコに話そうとはしなかった。それは、親子の重要なページを誰かに話すのが躊躇われたのと、単純にライはカコという男のことを好きでなかったからだ。

代々魔王の御側付きを担うノライ家と、代々魔王の近衛隊隊長を担うイクォール家の間には、ライバル関係のようなものが介在して

いる。お互いに表だって敵意を露わにすることはないが、内心では互いに魔王の傍にいるのは自分だという自負を掲げている。それが、自然な流れで互いの中に敵対心を生み出させているのだった。

「……」

はつきりとした物言いをしないライに、カコはそれ以上追及することはなかった。この男がこういう物言いをして喋ったことは過去に一度たりとてなかったからだ。

「まあ、私達は魔王様がなんと仰られようが、そのお傍に付けばいいでしょう。もっとも、貴方の場合は魔王様に力の使い方を伝授するという重大な役割があるのでしょうけどね？」

皮肉染みた言い方で、ライは言う。過去、魔王に力の使い方を伝授したという話は存在しない。ライの物言いは、その光栄な役割を担うのが自分ではないことに対する八つ当たりのようなものでもあった。

「自分は与えられた役割と、担うべき役割をただ全うするのみよ」「カコはそれだけいうと、背を向けて歩き出した。しばらくその背を眺めていたライも、小さく鼻で笑うと、その場から去って行った。

三話（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

少し疑問なんです、読んでくださっている方はこの文章読みづらかったりするのでしょうか？

少しそのあたり不安な誉人でした。

四話

翌日から、魔王ではないものの、それに限りなく準ずる形で霧の生活は始まった。

その前に、ギリアムという国における魔王のあり方を説明しよう。魔王とは国の王ではありながら、その生活は人間族の王族とは若干の違いを見せる。人間の王族であれば、日中は政務に励んだり、あるいは軍の訓練を視察したりと仕事があるのだろうが、魔王にはそれが無い。魔王に求められるものは、ただ一つ、純粋な力のみである。その他の雑務などは御側付きであるライがその役割をになつたり、近衛隊の訓練で言えばカコがそれにあたる。魔王が君臨するギリアムには軍隊というものは存在しないので、視察というものはそもそもありはしない。

そのため、魔王が毎日何をして過ごすのか、それは魔王の赴くままに決められる。何の力も持たない状態の霧では、半ばニート染みた立ち位置にはまることになるが、幸いというべきか、今の霧にはやるべきことがあった。それは、カコという大男に魔族としての力の使い方を学ぶことだった。

魔族が力を使うにはとある手順を踏む必要がある。若干話はずれるが、そもそも人間族と魔族の違いとは、その体に『魔素』と呼ばれる成分を取り込んでいくかどうかによる。その魔素を如何に取り込めているかどうかで魔族としての質が決まるのだが、どの魔族であつても、この魔素がないと力を行使することは出来ない。なので、魔族が力を使う場合、まずは周囲に漂う魔素を己の内に取り入れることから始まる。

「……」

しかしながら、現代に生きていた普通の人間である霧にとって、その魔素とやらをどう取り込んだらいいのか分かるはずもなかった。

カコから魔素という存在、その取り込み方について「魔素を感じて、それを皮膚から呼吸するかのように吸い込むのです」と説明は受けたものの、それで出来ればきつと誰も苦勞はしないと霧は思った。

「陛下、慌てずにゆつくりと、大気に満ちる魔素を感じるのです」額に汗をにじませながら瞑想するように集中する霧に、カコは助言を加える。先ほどから何度も同じようなことを聞かされているものの、一向にその魔素とやらを感じることは出来ていない。何がいけないのだろうかと霧は思うものの、その答えは出るはずもなかった。

それもそのはずで、そもそも魔族が魔素を取り込むことは呼吸するのと同じようなもので、生まれ持つて出来て当然の技術の一つなのだ。人間が呼吸の仕方を誰かに説明するとしても「息を吸って、吐く」としか説明できないのと同じように、カコにも実際どういう原理で魔素を取り込むのかという説明は出来るはずもないのだ。

だが、カコからしてみれば、相手は十年と短いながらもこちらでの生活を送っていて、更に魔王の血を引き継いでいる真正正銘、魔族の最高峰に位置する存在なのだ。魔素の吸い方が分からないということ自体、カコには理解しづらいものがあつた。

既に訓練を初めて三時間が経過していた。その間したことと言えば、説明と、あとはひたすらに霧が目を閉じて集中しているだけだった。何ら進展のないこの状況に、カコは何が違う方法を試すべきかと考え始めた。

「ふうー……」

見れば、霧も若干疲れの表情を見せている。カコは周囲に立つ近衛隊の一人に目配せをした。合図を送られた近衛隊の一人は、自分の腰に下げていた、竹のようなもので出来た簡易の水筒を手に持つと、霧に近づきそつとそれを差し出した。

「陛下、これを」

「ん？ ああ……」

肉体的には何ともないが、精神的に酷く疲労していた霧は、簡単な返事だけをしてそれを受け取った。差し込んである蓋を抜いて一口飲みこむと、水かと思っていたのは果実水だったようで、仄かに甘味を感じさせてくれるものだった。

額を流れる汗を袖で拭いながら、霧は陛下と呼ばれることに慣れ始めた自分が何だか可笑しくて苦笑を浮かべた。

霧たちが居るこの場所は城内の、主に近衛隊が訓練を行う一室だった。広さは現代でいうところの学校の体育館ほどはあり、数百人は収容することができだろう。部屋の奥には的なのだろう、木で出来た人型の人形がずらりと並んでいる。百人はいると聞いた近衛隊の三分の二は現在その的に向かって何やら魔法らしきものを発しており、残りの三分の一は霧から十歩ほどの距離を取って円の形に待機している。

朝食が済んでからずっとこの調子だった。霧が少し暑そうにすれば待機している近衛隊がタオルを持って来たり、先ほどのように水分を渡してくれたりする。その際に彼らは必ずと言っていいほど、霧のことを「陛下」と呼んでいく。最初は否定していた霧だったが、五度目になるあたりになって否定する気も失せていた。

母親には魔王になるつもりはないとはつきり断言したはずではあるが、その話がかもしたたら未だ家臣一同に伝わりきっていないのだろうかと推測するが、きつとそれは違うのだろうなとも思った。何故なら、霧が最初に「俺は魔王ではない」と否定したにも関わらず、断固とした視線で「陛下」と呼び続けているのは近衛隊を率いるカコその人であつたからだ。

何を持ってカコという男がそれほどまでに自分を魔王と呼びたがるのかは分からなかったが、少なくとも彼の中には譲れない信念みたいなものがあるのかもしれない。だが、だからといって実際に魔王ではない自分のことをそんな風に呼ばれ続けることは、どこかくすぐったい様な申し訳ない様な気持ちになってしまう。これは後で母親に言つて聞かせてもらわないといけなかな、と霧は思いなが

ら、一向に進展のない魔素を感じる訓練を再開した。

✖ ✖ ✖ ✖ ✖

結局昼を迎えるころになっても霧が魔素を感じることは出来なかった。いつの間にか入室していたメイドの「ご昼食のお時間です」という言葉を合図に、訓練は一先ず終了を迎えたのだった。

同時に訓練を行っていた近衛隊も休憩の時間を入れるらしく、カコは近衛隊を整列させると、色々と指示を出していた。その指示の中に、自分の警護をする人員を選別しているのを聞いて、霧はつつい口を開いてしまった。

「さて、俺の警護はいらないぞ」

「――」

遮る形での言葉に、カコはゆっくりとした動作で霧を見た。そこには指示を邪魔されたことに対する不満は見えなかったが、同時に何の感情も見出すことは出来なかった。霧はその視線に気圧されるかのように一歩下がってしまったが、ここで引いたらずるずると魔王扱いされてしまうと思い、ぐっと耐えた。

「……しかし陛下、今は陛下は力をお使いになれない状態。もしも刺客が現れた場合、如何様にされるおつもりでしょう」

抑揚のない、しかしずっしりと重みを感じさせる声で、カコは言う。

「と言われてもな。そもそも魔王でない俺を狙う輩がいるのか？」

「陛下を魔王ではないと捉えているのは、恐れながら陛下ご自身のみかと存じます」

「む……」

そう言われてしまうと、確かにそうなのかもしれないと思う。先日とは違い、今日の朝食の場には母親であるアミリアと、ライ、更にはカコまでもが居たのだが、その際、先日のアミリアとの話の流れを伝えたというのに、二人の態度は一向に改まる気配を見せなかった。ライもカコも、自分のことは「魔王様」あるいは「陛下」と呼び続けたのだ。身の回りの世話をすることとで付けられたメイド達も、霧のことをただ「魔王様」とだけ呼び、霧がいくら呼び方を直させようとしても、まるで糠に釘を打っているかのように効果なかった。

そんな経緯があるために、カコの言葉に思わずうな頷いてしまいそうになった霧ではあるが、しかし自分は魔王になるつもりはないわけで。

「確かにそうかもしれない。だが、俺と母上との間で、俺は魔王になるつもりはないという話があり、母上もそれを了承したんだ。お前が臣下ならば、王妃の決定には従わなければならないのではないか？」

「お言葉ですが」

と、カコは初めて感情らしきものをその表情に浮かべた。それは先ほどは見せることのなかった、確かな不満の色だった。

「我ら近衛隊の主人は魔王様ただ御一人にございます」

今度こそ霧ははつきりと気圧される自分を感じた。が、しかし反面若干の安心もしていた。それは、まるでロボットのようなカコにも人間らしい感情が見えたことに対する安堵だった。先ほどよりも気持ち喋りやすくなった霧の口は、揚げ足を取るかのような言葉を発した。

「じゃあその魔王である俺が――」

と、そこまで口にして、霧は自分から墓穴を掘った気分になった。

「なにか？」

「――いや、なんでもない」

霧の狼狽した顔を、また無表情に戻したカコが見つめる。霧はそれから逃げるようにして、室内から出ようと扉に足を向けた。

——馬鹿か俺は。何を自分から魔王だと名乗ろうとしているんだ。

早足に歩を進めながら、先ほどの自分の発言を叱咤する。これ以上迂闊なことは喋れないと感じた霧は、そそくさとその場を去る。そのまま部屋を出ると、そこには先ほど呼びに来たメイドが立っていて、ぺこりと優雅な一礼を見せた。

「それでは魔王様、ご案内いたします」

たったいま自分で墓穴を掘ったばかりなので、魔王と呼ばれることに何だかやりきれない思いを感じた霧だった。

✱ ✱ ✱ ✱ ✱

霧が去った扉を見つめながら、カコは腕を組んだ。

「ふむ……」

取り分けて自分から誘導したつもりではなかったのだが、霧が自分から魔王であると名乗ってくれそうになったとき、内心でカコは喜色の感情が浮かんでくるのを感じていた。そのまま自分は魔王であると認めてくれたならどんなに嬉しいことだったろうか。

ライのように魔王が魔王であるという確認をすることも出来ないカコにとって、霧が魔王であるというのはある意味思い込みにも近いものがあつた。だが、王妃が自分の血で呼び出したのが霧であることと、心底気に食わないことだが、ライの秘術によって霧が魔王であるということは確定的になっているのだ。例え霧がそれを否定したからと言っても、カコにとって霧が魔王であることは既に確定

事項なのだ。

当の霧は何故か魔王であることを否定して護衛を拒否しているが、そんなものはカコには関係なかった。何故なら、元来魔王には近衛隊という存在自体が“いない”ものなのだから。今更霧に護衛がいないと言われても、そんなことは百も承知なのである。だが、今の霧は歴代の魔王とは違い本当の意味で力がなく、それこそ魔族の刺客と相対した場合瞬殺されてしまうほどにか弱い存在なのだ。ある意味、ギリアム国近衛隊は隊が作られて初めてその価値を見いだせる状況に居るといつても過言ではない。

「まあ、焦る必要はあるまいな」

少なくとも、霧がこの国で生活することは確定している様子なので、時間が立てば自然と近衛隊が周囲に待るようになることにも暗黙の了解をもらえるようになることだろう。

カコは滅多に見せることのない笑み——ほんの少し、頬を動かしたただけだが——を見せると、待機している近衛隊に指示を出すのだった。

✖ ✖ ✖ ✖ ✖

突如鳴ったノックの音に、ライ・ノライは目になっていた書類から視線を上げた。

「入りなさい」

「失礼いたします」

ライの言葉に反応して入室してきたのは、先ほど霧を昼食の場まで案内したメイドだった。彼女はするりと部屋の中に入ると、僅かな足音も立てずにライへと近寄った。

「ふむ……では報告を聞きましょうか」

「はい」

一礼して、メイドは口を開いた。

「魔王様は朝食後から昼食になる今まではひたすらに訓練室にて魔素を取り込む訓練を行われており、今は王妃様と昼食をとられています」

「他には？」

「いえ。魔王様は朝食後に訓練室に入ってからはずっと訓練を続けていたご様子で、部屋から出たということは一切ございません」
「なるほど……」

わずかに俯き、顎に手を当ててライは考え込んだ。

ライの居るこの部屋も、魔王の私室やアミリアの部屋と同じように、やはり質素な様相を醸し出している。ただ違うのは、大量の書類をこなすために置かれたテーブルが大きな事務机のような形をしていることと、客を迎えるために一對のソファが置かれているところだろうか。

ライはそのまま立ち上がり、窓辺に寄ると思案に暮れた。

——まだ初日とはいえ、魔王様はこちらの生活を苦に思われていない……か？

その証明が、朝食後からずっとあの堅物頭との訓練に明け暮れていることだ、とライは思う。もしも嫌だと思ふのなら、ずっと私室に引きこもっていればいいだけなのだから。そうではなく、真面目に訓練に明け暮れているということは、少なくともここでの生活を前向きに考えてくれているということだ。

——このまま魔王様が順調に力を手に入れてくれれば言うことはない。如何に本人が魔王ではないと声高に叫ぼうとも、周囲がそうであるという認識があれば問題はない。

魔王というものはそもそも政務にも携わらず、ただ存在するだけで権威を発する。他国の貴族が何といおうが、これが長年のギリシアの施政なのだ。霧がこちらの世界で生活してくれると考えてくれ

ている以上、あとは魔王としての力を取り戻してくれば何も言うことはない。

ただし、一つだけライにとって懸念するべき事項がある。それは、霧が魔王としての力を取り戻した際についてだ。もしも霧が力を取り戻して出奔する、あるいはその力でもって自力で元の世界に帰るという手段を取られた場合のことだけがライは心配していた。

——もしも力を取り戻しても元の世界に戻りたくないと思わせる何かが必要か？

それは何か、と考えたとき。ライは自分の妹の存在を思い浮かべた。年はそれなりに幼いものの、魔素を取り込んだ魔族特有のメリハリのある体つきをしている自分の妹が霧と腕を組んでいる姿を想像し、ライは僅かに微笑んだ。

「ふふ……」

悪くない。ライはそう思った。妹がどう思うかという点も考えたが、刹那の内に懸念は消えた。この国に住んでいて、魔王の傍に居れると言われて喜ばない存在はまずありえないからだ。

ライは窓から振り返った。そこには指示をまっているメイドの姿がある。特別な訓練を施してあるこのメイドも、“そういった方面”には優れている。酒池肉林という言葉があるように、片っ端から綺麗どころを魔王の傍にあてるのもありかもしれない。

「くつくつく……」

ライは湧き上がる喜びを堪えることが出来なかった。先代の『ノライ』家の当主である父から魔王に仕える喜びは、それこそ暗唱出来るほどに聞かされている。今まで実感の伴わなかったそれは、確かに今、ライの心をくすぐっていた。

——なるほど、これが魔王陛下に仕える喜びですか。

傍からすれば勝手に魔王のことを考えて行動しようとしているように映るだろうが、これがこの国における魔王への忠誠の表れなのだ。カコの率いる近衛隊のように、そもそも魔王には御側付きなどというものは必要ないのだ。魔王という存在はただあるだけで最強

であり、完璧なのだ。そこに補佐する魔族も警護する魔族も必要ではない。

では何故ライやカコのような存在が居るのか。それは、過去に、魔王の存在に心酔した存在が“勝手に”その護衛を努めるようになったり、御側付きをするようになったからだ。

だから、ライやカコは迷わない。己のしていることがエゴでしかないと気づいているからこそ、その方針を変えるつもりはない。もしも本当に魔王にとってふさわしくないことをこっちがしてしまっただならば、そのとき初めて訂正すればいいだけなのだから。

「さて……考えることは山ほどありますね……」

事務机の上に山のようになっている書類を見ながら、しかしライ・ノライの脳裏には、魔王に関することだけが次々と思い浮かんでいた。

四話（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

結構な人に読んでもらえているみたいで幸いです。

自分では内容がありがたりにならないように気を付けているつもりなのですが、なんか読んでみたら結果的にその辺にある小説と変わりにないようにも思える今日この頃。

精進精進。

五話

ここで、ライ・ノライという男の役割について語ろうと思う。

『ノライ』家は代々、魔王の御側付きを自称し、実際に魔王の身の回りや世話を勝手にこなしてきた。先代の当主である父は先代魔王が崩御した際にもののあつさと隠居しているために、現在ではライがノライ家の当主に収まっている。

ギリアムという国において、魔王は政に一切の口出しをしない。それは初代魔王の頃から続いている慣習で、それはこれからも続いていく不文律だろう。過去に魔王が国に関することで口を出したことと言えば、三代目魔王が国に名前をつけたことと、五代目魔王が自身の性をエクスクワと決めたことくらいである。

故に、国の政治に関することはライが受け持ち、周囲も報告・裁可の類は全てライに持つていくことにしている。とはいえ、人間族に比べると、魔族国家の政治は分かりやすいものだ。魔獣などで被害が出たとしても、各々の村や町には一人くらい実力をもった魔族がおり、わざわざ国に居る貴族や近衛隊を派遣するまでもなく退治してしまう。税金もギリアムという国だけに限らず、密な税率は決まっておらず、毎年取れる農畜産物や掘り出される貴金属を“自主的に”国民が納めているのが現状だ。それだけ魔族にとつて魔王というものは特別な存在であり、尊い扱いをすべき対象なのだ。

そのため、ライが行うのは献上された税物をまとめることと、各地の報告、そして貴族からの嘆願を聞くことがその主なところだ。そしてこの日もまた、ライの元には一つの嘆願書が上がってきていた。

「ふむ……魔王様に顔見せをしたい……か」

手に持った嘆願書を、ライは机の上にひらりと放った。現在魔王を召還したという事実は魔族国家の他国にはまだ知らせていない。

が、国内の貴族、あるいは何らかの権力や地位を持っている魔族は魔王召還の現場を直接見ている。霧が魔王にはならないという意味を見せていることは“敢えて”知らせていないので、彼らにとってみれば未だに新たな魔王の誕生を祝う式典をしていないのが不思議で仕方ないことだろう。

何らかの事情があることは式典を行ってないことで察しているだろうが、しかしだからと言って魔王という尊い存在がいるのに自分の存在をアピールしないのはギリアムに住む権力者にとってはあり得ない。実際に、霧が召還されて次の日から、幾度となく霧と顔合わせをしたいという嘆願書が送られてきていた。しかしライはそれら悉くを拒否してきた。折角霧が調子よくこちらの世界に馴染もうとしてくれているのに水を差すような真似をしたくなかったからだ。

だが、今日送られてきた嘆願書に記されている者のサインを見て、ライは僅かな躊躇いを覚えた。

「ふうむ……どうしたのですかね」

嘆願書を送ってきた者の名をトヴィー・ゼイツといい、魔族としての格で考えると下の下もいいところの弱卒だった。しかし、彼は魔族としての格の低さを利用して人間族の世界に足を運んで情報や色々なものを持って帰ってくるという重要な役割を果たしている。そして、それらを上手く利用して各地の貴族に伝手を持っている利権者でもあるので、下手をするとその辺の貴族よりも扱いが難しいのだ。

嘆願書の内容は顔見せだけでなく、献上物があるというので直接それを渡したい旨が記されている。ただ会っただけならば霧に煩わしさを与えてしまいが、贈り物があるのならば少しはそれも薄れるだろうか？

「いえ……しかし……」

もう一つ、ライが気になるのは、トヴィー・ゼイツが霧と会ってから、その印象を他者に吹聴してしまうことだ。今現在の霧は嘘で

も魔王として相応しいとは言えない力なのである。もしも二人を会わせたときにゼイツが霧にあまりよろしくない印象を覚えてそれを流布されてしまうと、少々不味いことになる。まあ、トヴィー・ゼイツは良くも悪くも“強者”に這いつくばる弱者なので、王妃並びにライ、カコを敵に回すような言動を取るとは思えないのが安心といえは安心だが。

「さて……これは私だけでは判断しかねますね……誰かある」

ライが机の上に置いてあった鈴を鳴らすと、ノックの後に一人のメイドが入室してきた。

「王妃様の元へと向かいます。貴女はイクオールを呼んでもらえますか？」

「かしこまりました」

メイドは優雅に一礼をすると、するりと部屋から出て行った。

「全く……世の中うまくは回らないものですね」

どのことについて言っているのか、ライは顎に手を当てながら、そう呟いた。

✖ ✖ ✖ ✖ ✖

この気まずい空気は何かならないものか、霧は今日何度目になるか分からないため息を吐いた。

現在は昼食を終えて一時間が経ったくらいだろうか。霧は自室で椅子に座り、所在無く時間を過ごしていた。段々と慣習化しつつある訓練は午前だけにするのが最近の暗黙の了解なのか、午後はこれといってすることがない。自分から訓練をさせてくれと言えもしかしたらカコは頷くのかもしれないが、そこまで勤勉でもない霧は

ゆつたりとした午後の時間を過ごすことにしていた。

だが、唯一不満を上げるとするならば、まるで見張りのように立つ近衛隊の姿だった。彼ら、あるいは彼女らは室内の四隅、そして四辺の真ん中にそれぞれ立っており、霧はずっとその八対の視線を浴び続けているのだ。また扉の向こうでは二人の護衛も立っており、まさに軟禁状態ともいえるほどの警護っぷりを近衛隊は見せてくれている。自分のことを魔王とは思っておらず、またそういった扱いをしてほしくない霧にとっては軽い拷問にも等しい扱いではあったが、訓練初日の件があつて、霧はカコにこの扱いを止めてくれと強く言えないところがあつた。

カコはカコで、霧が何も言わないことをいいことにこうして日に日に護衛の数を増やしている。現在はこれでも近衛隊全員の数からすれば少ないほうで、追々は訓練をしてない半数を警護につけるつもりである。

「はあ……」

また、ため息。いつそのこと昼寝でもすれば早く時間が経っているのかもしれないと考えたが、こんな視線を向けられた中で寝れるほど霧は神経が太くなかった。何かいい時間つぶしはないものかと考えたが、こちらの世界の娯楽は何があるのか分からない霧では思いつくはずもなかった。

かといって、この視線のグサグサささる空間の中でじつとはしていたくない。思い切つて、霧は散歩にでもいくことにしようかと思つたその時、部屋にノックの音が響き渡つた。

「……？ 誰だ」

疑問に思いつつも誰^{すいか}何した声に返ってきたのは、ここ数日で聞きなれたものだった。

「私です、坊や。今は入ってもよろしいですか？」

「ああ……どうぞ」

本当は顔を合わせづらい相手ではあるが、拒否する材料もない霧は力なく了解を出した。

自分のことを母上と呼んでくれと言われ頷いた霧ではあったが、
気恥ずかしさと僅かな躊躇いがあって、未だに一度たりとて彼女の
ことを母上と呼んであげてはいない。彼女は彼女で朝食と昼食はこ
こ数日ほぼ毎日のように顔を合わせていて、その都度何か期待した
視線を送ってくるのだが、霧はそれに応えてあげることは出来てい
なかった。

「では、失礼しますね」

言いながら入ってきたのは、アミリアだけではなかった。その後
ろにはライとカコ、そして見たことのない男が居た。

一体そいつは誰なのかと訝しげな視線を送る霧に、アミリアはい
つものおっとりとした口調で説明を始めた。

「今日は坊やに挨拶をしたいという臣下がいたので紹介しようかと
思います。……これに」

アミリアの言葉のあとに、まるで生まれたての子猫のように身体
を震わせる男は恐る恐るといった体で霧に近づいてきた。

「ま、ま魔王へ陛下におかれましては、ごご、ご機嫌麗しく……
！」

——なんだこいつ？

それが霧の率直な感想だった。何に怯えているのかさっぱり分か
らないが、それともこれが素なのか、小柄な体の男は霧の方を見よ
うとせず、視線をずらしたままに膝を着いて頭を垂れた。

「ほほほっ、本日は魔王陛下のたた、為に献上したきき、物がござ
いましてえっ！」

一瞬、ほんの刹那の間ではあったが、言い終わるときに男の視線
がこちらを向いた。するとますます怯え口調だった男は叫ぶように
かん高い声を上げた。

一体どうしたらいいのか、困惑した顔を上げると、視線のあった
ライが頷いてその男に視線を向けた。

「トヴィー・ゼイツ、名を名乗らぬか」

——いや、そうじゃなくてさ。思わず声に出して突っ込みそうに

なる自分を、霧はぐつと耐えた。

「は、はは！ 申し訳ございませんぬ！ わわ、わたくしめの名前はトヴィー・ゼイツとお、申します！ いい以後お見知りおきを魔王陛下……」

「あ、ああ……」

霧は返事を返すのが精いっぱいだった。男の態度は、自分のことを魔王と呼ぶことを訂正させようとする気が失せるほどのものであったのだ。

「で、ではこちらに献上したきものがございまして……」

男はパンパン、と二度手を叩いた。すると、外に待機していたのだろうメイド二人が何やら手に持って入室してきた。

「ここちらはせせ精霊を閉じ込めましたビンであります、いい一般ではまず手には入らないものであります」

「ほお……」

思わず霧は声をあげた。両手で輪を作ったくらいの大きさの瓶の中に、何やら小さな羽を生やした何かが入っているのだ。じつくりとそれを見てみると、現代では絵本や何かでしか見たことがない妖精のようなものが入っていた。妖精はその小さな体で何かを言いたげに瓶を叩いているが、生憎と霧には何を言っているのか聞き取ることが出来なかった。

霧が興味を持ったことで世話心が湧いたのか、ライがゼイツの続きを引き継ぐかのように説明を始めた。

「こちらは精霊の中でも希少種である風と水を司る精霊族の一種として、主な使用方法としては目の保養に飾るか、あるいは契約して用います」

「へえ」

気持ち半分に聞きながら、霧の視線はその精霊に向けられていた。透明な二対の翼に金髪 of 長髪、花をあしらったようなゴシック系のひらひらした服を着ている妖精は、今まで見たこともないほどに愛らしいものだった。

こちらの世界に来て初めてともいえる霧の様子に、アミリアはどこか満足そうな顔を浮かべ、ライも同様に頬を上げている。カコは無表情を貫いているので何を考えているのかは分からない。

「それで？ もう一つっていつのは？」

妖精の姿に気分を良くしたのか、霧は機嫌のいい声で促した。

「は、はは。ここからは名工が打ちました剣でございます……」

霧の機嫌のいい声に少しは調子をよくしたのか、男は気持ち気楽な声で説明をしていたが、剣をメイドが差し出したあたりで言葉が尻すばみになっていった。それは、剣を出した瞬間にあからさまに霧ががっかりとした表情を見せたのが原因だった。

「ふーん……」

霧にとって剣などはこの先使う予定もなければ欲しいとは思わなものの一つだった。確かに刀剣類というものはロマン溢れる一品かもしれないが、先に出された妖精の印象が強すぎて、すごい剣ですといわれても今一つ喜びにかけてしまう。

「それで、トヴィーといったっけ？」

「は、はあっ！」

膝を着いたまま、トヴィーは両手を組んで頭を垂れる。

「これって、本当に俺がもらってもいいの？」

「むむ無論のことにございます！」

「……」

とは言われても、実際は自分は魔王でもなんでもないのに、本当にもらってもいいものかどうか。判断に困った霧は、ライに視線を送ってみた。するとライは当然といった風な表情で鷹揚に頷いた。

——まあ、もらえるものはもらってしまえばいいか。そう考えた霧は、それじゃあと言って賜物を受け取ることにしたのだった。

✖ ✖ ✖ ✖ ✖

霧との対面が終わって、城の入口でライとトヴィーは向かい合っていた。

「それにしてもゼイツよ、貴様何故あままでに魔王様に怯えるような様子を見せていたのだ？」

魔王に畏敬の念を抱くのはライにとって当然だが、それにしても先ほどのトヴィーの様子は行き過ぎているかのようにも思えた。事実、トヴィーが商人として商っている貴族相手でも、あそこまで低頭するところをライは見たことはない。無論、見たことがないだけで知らない所ではもっと卑屈な態度をとっているかもしれないのだが。

「ははは……いえ、やはり恐れ多くも魔王様の前に立つと緊張してしまいました……」

「ふむ……そうですか」

正論と言えば正論なので、ライはそれ以上追及することをやめた。

「まあ、今日の献上物には魔王様も思いのほか喜ばれていたようです」

「そうであれば幸いです、はい」

「また何かありましたら嘆願書にてお願いいたします」

「かしこまりました。それでは私はこれにて失礼します……」

まるでゴマをするかのように頭を下げて、トヴィーはライに背を向けて去って行った。しばらくその背を眺めていたライは、内心で安堵の息を吐いていた。今日の様子を見る限りでは、トヴィーが魔王の悪い噂を流すといったことはないように思えたからだ。あれが全て演技だとすれば立派なものだが、あの怯えようは紛れもない本物だとライは確信していた。

「さて、私も戻りますかね」

そう言つて、踵を返したライは、ふと疑問に思った。

——先代魔王様の時代にも、彼はあそこまで怯えていたのだろうか、と。

些細な疑問ではあつたが、何故か心の中に刺さるその答えを父ならば知っているだろうか。ライは思った。もしそうならば、今度聞いてみようかとも。

※ ※ ※ ※ ※

しばらく歩いてから、トヴィーは後ろを振り返つた。もう城の扉ははるか向こうになつていて、ライもとうの昔に去つて行つたようだった。トヴィーは広い街路から外れて裏路地へと入り込んだ。薄暗いその場所は表通りに対して汚らしげな印象を与えるが、今の彼はそんなことを気にしている場合ではなかった。

正面を見て、後ろを見て、誰も居ないことを確認した彼は漸くといったふうにして両膝を着いた。それは耐えていた何か切れたような落ち方だった。

「はっはっはっは……」

動悸が激しいのか、息苦しいのか、顔中に汗を掻いたまま、とうとうトヴィーは両の手を地面に着いた。四肢を地面に着いた状態のまま、トヴィーはしかし立ち上がるうとはしなかった。いや、立ち上がるうと思うことすら出来なかった。彼にとって、こうしてここまで歩いてこれたこと自体が奇跡に近かつたのだ。

果たして、気づいていただろうか。王妃は、ライ・ノライは、カコ・イクォールは。霧の召還の際、ただ一人怯えて腰を抜かしていたのがトヴィー・ゼイツであつたことを。トヴィーが今日、霧と会

う前から毎日毎日怯えた日々を暮していたことを。彼らは気づいて
いただろうか。

「——なんだ、なんだ、あれは」

吐き捨てる様にトヴィーは呟いた。それは信じれないものを目の
当たりにしたかのような声だった。

——あれが今代の魔王か。あれが、魔族の最高峰に位置する存在
か！

内心で叫んだ。それは怯えであり——歓喜だった。

魔族として力に優れていない彼は、ライの思っていたように魔族
の中では弱者でしかない。しかしそんな彼にも、魔族らしく一つの
特殊な能力が備わっていた。それは、相手がどれほどの力を持って
いるのかを脳裏にイメージで焼き付けることが出来るというものだ
った。彼はその能力を使って、これまで強者である方について立ち
回ってきたのだ。

そんな彼は、先代魔王が崩御したとき、そして次代の魔王が即位
しなかったときに、悩んだ。果たしてこのままグリムという国に
居ていいのか。もしこのまま次代の魔王が居なくなれば魔王の座を
巡る争いが起きるに違いない。しかし王妃は時代の魔王は今も隠れ
ているだけで十年後に戻ってくると言った。

彼は悩んだ末に、その言葉を信じてみることにした。そして、彼
は結果的にその賭けに勝ったのだ。誰が何といおうと、霧という存
在は魔王以外に違いない、途方もない力を秘めた存在だったのだか
ら。

彼は見たのだ、ドラゴンが己の体を鎖で雁字搦めになっている姿を。
そんな鎖も、魔王自身が“望めば”今すぐにでも壊れるだろうもろ
さを持っている。

「はは、はははははは！」

まるで狂ったかのような笑み。だが確かにトヴィーは正気を保って
いた。ただ、歓喜に狂っていた。

「はははははははははは！」

誰も居ない路地に、長く長く、トヴィーの音が響き渡っていた。

五話（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

なんだかんだでHIT数が上がってきてアクセスを見るたびにニヤリとする頬が抑えられない誉人です。

少し質問なのですが。

このままの量と質で毎日更新するのと、量と質はあがるけども数日に一度更新するのと、読者側からすればどちらがいいのでしょうか？

今日のはなんだか元気ない内容だなあと思ったので疑問に思った誉人でした。

六話

霧がこちらの世界にきて、早くも三週間が過ぎようとしていた。

その間、霧がしていたことといえば、もはや日課となった午前の訓練と、こちらもまた定例となりそうなお祝いの品を持つてくる者たちの相手だった。トヴィーが来てからというもの、賜物を持つて来ればいいと思ったのか、色々な貴族連中が霧の元を訪れるようになった。以前はそんなことなかった状況は、トヴィーが訪れたときの霧の反応を見たライが、嘆願書を出す貴族に会わせても問題ないと判断したことから転じた状況だった。

確かに霧自身、自分のためと色々なものをプレゼントされることに忌避はないものの、その対象が魔王という点ではいまいち腑に落ちないところがある。自分は魔王になるつもりはないと“アミリア達には”はつきりと明言しているはずなので、こうして自分の元を訪れる貴族連中はそんなことを関係ないと思っっているか、あるいは単純に魔王の息子という点を評価しているのかな、と真相を知らない霧は思っていた。

殺風景だった魔王の私室がだんだんと賜物でいっぱいになっていく光景は喜ぶべきなのか、何とも悩むところだった。送られてくるものはそこまで霧の琴線に触れないのもまた複雑な心中を生み出す要因となっている。武器やその他飾り物を送られても、霧はそれに何の価値も見出していないし、使おうとも思わない。かといって捨てるわけにも売るわけにもいかず、こうして放っておくしかないのだから扱いに困る。

今の所まだましだったかな、と思うものは衣類くらいのもものだったが、それにしただって明らかに高価だと分かる質感をしているのだから普段着や寝間着に使いたくても使えない。結局のところ、霧がこれまでもらった賜物の中で喜ぶべきものといえば……

「お前くらいだよなあ、ピク」

「――」
テーブルの上に置いた瓶の中には、トヴィーからもらった精霊族とやらの可愛い女の子が座り込んでいた。彼女はこっちの声が聞こえるのか、話しかければちゃんと反応してくれるのだが、残念なことに向こうの声は霧の耳には全くと言っていいほど届いていないのだ。もしかすると言語自体が違うのか、瓶に特殊な何かを施しているのかと思う霧だったが、その辺りについて説明を聞いていなかった。

ピク、というのは霧が付けた名前だった。ピクシーから取ってピク。本当はベルにしようかとも思ったのだが、その名を持つ妖精の姿とピクとは何だか印象が違ったのでこうして彼女の名前はピクに決まったのだった。

今日の午前の訓練と昼食は終わっていて、霧はいつものごとく暇を持て余している状態だった。そしていつもの如く部屋の中には近衛の姿があり、その数は八から十四人にまで増えている。きっと部屋の外の護衛も人数が増えているんだろうなと思う霧だったが、わざわざ確かめようとは思わない。

さてこれからどうしたものかな、と思う霧の脳裏に、一つの疑問点が浮かび上がる。

「そういえば……」

ピクの言葉が分からないで気づいた。こちらの世界の文字は一体どうなっているのだろうか。どういう理由かはわからないが、こちらの世界に来て言葉は通じている。では文字はどうなのだろうか。今のところこちらの世界に来てこちらの文字を見た記憶はない。

「……」

霧はちらと近衛隊の一人を見た。無言無表情で立っている彼と視線が合う。

――聞いてみるか？

三週間も護衛をされておきながら、霧は彼らと一言も言葉を介したことがなかった。話す必要性がなかったことと、話しかけづらい

というのが理由ではあったが、今は話す必要性が生まれている。

「……」

——やめた。

数秒見つめ合ってから、霧はそう結論を出した。聞かなくても城の中を彷徨っていたら勝手に図書館なりに着くだろうと考えてのことであった。

折角なのでピクも散歩がてら連れて行ってみるかと思い、霧は瓶を優しくつかむと、その足を扉に向けた。そしてさあ外に出ようかというところになって、扉の前に立つ二人の魔族に声をかけられた。

「魔王様、どちらへ？」

「散歩」

「それではお供します」

霧が何か言う前の二つ返事で決められてしまった。背後でプレートメイル同士が奏でる音が聞こえたかと思い振り返ると、室内に居た護衛全てが霧の後ろに集い始めていた。

「いやいやいや、待った待ってくれ。散歩といっても城内を散策するだけだから護衛はいらないよ」

「お供します」

暖簾に腕押しとはこういうことをいうのか。霧は知りたくもなかった状況に頬を引くつかせた。彼らはあの力コの部下だけあってこちらの話や都合はあまり耳に入ってくれないらしい。嘆息を一つ吐いてから、それならばと逆に聞くことにした。

「それじゃあ、図書室かそういった類の部屋は城内にはあるか？」

「ございます」

「そこに案内してもらえるか？」

「かしこまりました」

思いのほかスムーズに決まった話に、こんなことならもっと早くにお願いしていたら退屈な時間を過ごさなくてよかったのかも、と霧は思った。なんとなしに会話の切っ掛けを掴んだ霧は、このまま

会話を続けてことにした。

扉を出て、先行する護衛の一人に声をかける。

「なあ」

「なんでしょうか」

そう言われて、聞きたいことがありすぎて霧は言葉に詰まった。近衛隊のことについても聞いてみたいし、カコ・イクオールについても知りたいし、文字についても教えてほしい。

だがこうして直接近衛隊と話せているのだから、彼らのことを聞いてみるべきかと思う。

「近衛隊の面々は普段何をしているんだ？」

「魔王様の護衛をしています」

——それは知ってる、と霧は思った。

「そうじゃなくてさ、俺の護衛の時間以外だよ」

「訓練をしています」

「他には？」

「ございません」

「……」

会話が終わってしまった。確かに地球に居た頃からあまり人付き合いのいいとは言えない霧ではあったが、今の自分の会話には何の非もないはずだと思い返してみる。

「……」

考えれば考えるほどに会話に問題はなかったよなあ、と思う。何だかこのまま会話を続けようとしてもきつと今のような流れになるんだろうなという結論に達した霧は、目的地に着くまでは黙っておくことにしたのだった。

✖
✖
✖
✖
✖

「なんだこりゃ……」

図書室に入って霧が最初に発した言葉がそれだった。

霧が図書室のつもりで入ったそこは、広さこそ学校の教室四つをくつつけた程度ではあったが、その高さが途轍もない。円形の壁一面にはめ込まれた本棚が遥か上にまで続いている。部屋の中央にくられている螺旋階段も同様に天に上らんとする高さを誇っていて、一体どれほどの本がここにあるのか見当もつかなかった。

螺旋階段は一階分上がることに踊り場のような場所をとっていて、そこにはテーブルと椅子が用意してある。気に入った本があればそこにもってきて読めるようになっていいるのだろう。

「これ、どんだけあるの？」

「城の高さと同等の高さがあると聞き覚えがあります」

霧の呟きに答えてくれたのは、先ほど会話をぶつちぎってくれた近衛隊の男だった。

「はぁ……」

首が痛くなるほどに上を眺めていた霧は感嘆の息を吐いた。まさか図書室につれてきてもらうつもりが巨大な図書館だとは思ってもなかったからだ。しかし、考えようによってはこれだけの本があれば退屈はしないだろうというプラス思考も湧いてくる。

部屋の至る所に散らばり始めた近衛隊をあえて視界から外して、

霧は一先ず本棚に近づいてみた。

「……あー、なるほどね」

背表紙を見た途端、霧は納得の声をあげた。そこに書かれている文字が全く見たことないものだったからだ。地球に居た頃は確かに英語かハングル文字くらいしか目にしたことがない霧だったが、きつとこの文字はそれ以外のどれにも該当しないのだろうなと何となく思った。一度テーブルが置いてあるところまで移動し、ピクの入った瓶をそこに置くと、もう一度本棚に近づいてみる。一応という

ことで一冊の本を抜き取り、ぱらぱらと捲ってみたが、やはりそこに記されている文字は霧の読めるようなものではなかった。

「はあ……」

いい暇つぶしが出来るかと思ったのが早速頓挫したことに何だか悲しいものを覚えながら、手に持った本を元に戻す。いつそのこと今度からは午後はこちらの文字を覚えることに使うのもありかもしれない。そう考えると、ある意味時間つぶしが出来たことになるのだが、しかし霧はあまり勉強が好きではなかった。午前に行っている魔素の取り込み方の訓練はもはや惰性でしかないので、例外だ。

早速することのなくなってしまった霧はどつかりと椅子に腰かけた。そのまま背もたれに体重をかけながら、先の見えない遙か天井を眺める。

「どうすっかな……」

恥ずかしいので近衛隊に聞こえない程度に呟く。退屈な時間の訪れに目を閉じて静かな空間に身を浸す。すると、静謐な空間には自分の発する僅かな呼吸の音以外何も聞こえなくなった。

懐かしいと思った。霧は地球に居た頃に、こんな経験を数多くしていたことを思い出した。大学に入ってから若干ではあるが自由に扱えるお金が入ったこともあり時間つぶしをすることが出来たが、高校を卒業するまではそれこそ毎日退屈な時間と戦っていたのだ。

何故自分は生きているのか。何をするためにここにいるのか。これから何をしようというのか。哲学染みたそんな思考は、霧が児童養護施設に世話になってからずっと纏わりついていたものだ。結局その考えは大学に入り一人暮らしを始めたために答えを得ることはなかった。だが、お陰様というべきか、霧はこうした退屈な時間を過ごすことを苦に思わなくなっていた。

何もすることがないからだろう。目を閉じたまましていると、色々なことが思い浮かんでくる。自分の誕生日パーティーを開いてくれるつもりでいた施設の先生や子供たちは心配しているだろうか。いきなりいなくなったことでやはり警察なりに届けを出しているのだから

うか。今年は母親の墓参りに行くことが出来そうにないな、など。

「――」

その瞬間、何か気づいてはいけないことに気が付きそうになった。それが何なのか、はつきりとはしない。言葉に出そうなのに喉元で止まっているような、思い出せそうなのに靄がかかったような、そんな曖昧な何か。

霧は目を開けた。一体今自分は何に気付こうとしたのか。今考えていたことを振り返るが、それが何なのか、はつきりしない。

知らず、眉根に力がこもる。見えてこないそれは、しかし自分が知らなければならぬ何かだという確信があった。何故かはわからない。分からないからこそ、自分はそれをはつきりと理解しなければならぬのだと、自分の中の自分が囁く。

先ほどまで考えていたことを思い出す。施設、先生、子供たち、退屈、警察、そして――母親。

「――っ！」

そうだ、と霧は思った。今まで自分の中に当たり前に存在していたから疑問にも思わなかったが――自分の母親は一体何者なのだろうか？

自分は十年前にこちらの世界から地球へと送られたのだ。ならば、その世界で母親が居たこと自体がおかしいのだ。向こうに送ったのは自分だけだと確かアミリアは言っていたはずだ。ならば迷い子のように彷徨っていた自分を拾ってくれた優しいだれかが、自分の母親だったのだろうか……

「……あれ」

と、そこで霧は一つの事実に気が付く。向こうの世界における自分の母親の顔が思い出せないのだ。おかしい、そう、それはおかしいのだ。何故なら、アミリアの力によって、自分は向こうの世界で十年を過ごしたという記憶を持っているのだから。だから、少なくとも十年間母親と一緒に居たはずなのに、霧はその母の顔を思い出すことが出来ないでいた。

霧はしばらく幼少時代の自分を思い出そうと努めた。こちらの世界ののではない、向こうの世界で生活したというまやかしを覚えている限り思い出す。幼稚園、小学校低学年、確かに自分はその記憶を持っている。所々しか思い出せないのは単純に覚えていないからだろうと考えることが出来るが、しかしその中のどれもが母親の顔を映し出そうとはしない。

「……………」

もしかしたらそこまで気にするようなことではないのかもしれない。ある意味、十年という期間自分は母親と死別してきたのだ。あまり頭のよくない自分が覚えていないのも、当たり前かもしれない……

「……………」

——が、霧はそんな自分の思考を唾棄した。自分が向こうの世界の母親のことを忘れることが当然であつてたまるものかと霧は自身への憤りを隠そうとしなかった。記憶の中にある母親は、自分のことを守ってくれていた。周囲と馴染めなくて悩んでいる自分の話をしっかりと聞いてくれて、時に抱きしめてくれて、慰めてくれて、どんな時でも母は一緒にいてくれたのだ。だからこそ、霧にとって母親は前の世界の母しか居ないと今も思い続けているのに、そんな自分がどうして母の顔を忘れることを当然と思えるだろうか。

「ふう……………」

息を吐き、頭を冷静にしよう努める。考えをまとめようと、霧は一度頭の中をからっぽにして、改めて母親のことを纏めてみた。

母親は突然現れた自分を見てくれる人だった。

自分の向こうでの十年間はアミリアによる幻だった。

母親は自分が十歳のころに亡くなった。

「……………」

考えれば考えるほどに分からない。もしかしたら地球に送られる際に最初に自分と出会った人間が自分の世話をするような幻をアミリアが使っていたのかとも思ったが、そんなに都合のいい魔法の使

い方があるのだろうか。

「……」

分らない。これまで自分のことを最も理解してくれているのは母親だと信じていたのに、その自分は母親のことをまるで分かっていなかったのだと知り、霧は愕然とする思いだった。酷く胸が痛むような気がして、思わず霧は自分の胸倉を掴んだ。

しばらくそのままでぐつと耐えて、大きく深呼吸をした。少しは落ち着いてくれた自分の心中をそのまま冷静にしようと努めて、霧は椅子から立ち上がった。

明かりはあるものの、どこか薄暗い印象を持たせるここにいると、何だか嫌なことを次々に考えてしまいそうになる。霧はピク入った瓶を掴むと、出口に向かって歩き始めた。自然と集まってくる近衛隊のこと気にもせずに、霧は扉を開けて外に出た。

向かう先は自身の母と名乗る女性——アミリアの元だった。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

ついてくる近衛隊の一人に案内させてついたアミリアの私室の前で立ち止まり、霧は振り返っている。

「ここで待つてろ」

聞いてくれるか分らなかったが、これから入ろうというのが王妃の部屋だからか、近衛隊の面々は素直に頷いて廊下に整列をしてくれた。そのことに内心で安堵しながら、霧は扉をノックした。

思いのほか強く響いたノックの音に自分で驚きながら、アミリアの返事を待つ。

「はい」

「俺だ」

「坊や？ ……どうぞ、お入りなさい」

何かをしていたのか、一拍の間をおいてから、アミリアは入室を許可した。

そういえば自分の部屋以外に入るのはこれが初めてかもしれないと思いながら室内に入ると、霧は一瞬呆けたような表情を浮かべた。それは、内装が賜物で埋まる前の自分の部屋とまるで同じだったからかもしれない。

そしてもう一つ驚いた理由は、アミリア一人だと思っていたところにライと一緒に居たからだ。二人は何かを話していたのか、霧が入ってきたときにはまだ向かい合って座っていたが、霧が入室するとライは立ち上がり、アミリアの後ろに回った。

「中へどうぞ。立ったままもんでしょう、椅子にお座りなさいな」

それと何かお茶を、とアミリアは後ろに立つライに命令した。ライは鷹揚に頷いてから、室内を出て行った。

霧はその背を眺めてしばらくしてから、アミリアの反対側の席に座った。

「それで、何か私に御用ですか？」

単刀直入に聞いてくるアミリアの言葉に、もしかしたらそれを察してライは席を外してくれたのか、と霧は思った。

「ああ……」

ここまでできたというのに、霧はなんと切り出したものが未だ悩んでいた。しかしじっと眺めてくるアミリアの視線に負ける様にして、霧は思うままに聞いてみることにした。

「あんたの力についてなんだがな」

「私の？」

「ああ……」

霧は視線をアミリアと交わらせて言う。

「あんたの力は、例えば遠距離に居る無差別の相手にかけることも

「可能なのか？」

「遠距離……それは、どのくらいですか？」

「……違う世界くらいだ」

「……」

一瞬、アミリアは黙り込んだ。それは霧が言っていることを理解しようとする時間だったのだろう。

「それは不可能です」

「……」

「基本的に、私の魔法は私が視界に収められる範囲内ではしか使えない限定的なものです。なので、坊やの言うように、遠く離れた相手に任意の幻を見せるということは実質的に不可能です」

「そうか……」

霧は両目の間に指を当てて俯いた。知りたかったことは聞いたが、それで余計に向こうの世界における自分の母親の謎が深まったからだった。

「何か、他に聞きたいことはありますか？」

「……いや、いい。それだけだ、邪魔したな」

霧は頭を振りながら立ち上がった。

「お待ちください。今ライが紅茶を持ってきますからそれを飲んで

――」

「――いや、今はそんな気分じゃない。すまないが下げておいてくれ。邪魔したな」

霧はそれだけを言うと、まるで逃げるかのように扉に向かい、部屋から出て行った。

室内には残されたアミリアだけが残っている。アミリアはしばらく霧の出て行った扉を眺めていたが、力なく憂いた表情を浮かべると、小さく息を吐いた。

霧がこちらの世界に来て早三週間が経ったが、これまで一度たりとて母上と呼んでもらったことはなかった。確かにあの時、頷きを返してくれたはずの霧がそう呼んでくれないのは、まだ母親と認め

られていないからだろうか？とアミリアは思った。けれど、自分が霧にしてやることはそうない。唯一聞いたわがままと言えば、魔王になることを拒否したのを認めたくらいだった。それはそれでこの上ない条件を聞いたことになるのだが、それがどういう意味をもつか知らない霧にとっては何のありがたみもないだろう。

それに、先ほどの質問。あれは、間違はなく向こうの世界における母親について聞いていたのだらうとアミリアは思う。あえて先ほどは口にしなかったけれど、あの母親の正体について霧に話すべきだろうか。しかし、どうやら霧の中ではあちらの世界の母親は相当の価値をもっているのはこれまでの会話で把握出来ていた。

その母親の正体がアレだと知った霧がどんな反応をアミリアにしてくるか分かったものではない。それを恐れて、アミリアは敢えてアレの正体を霧に話そうとはしていない。無論、直接聞かれたならば答えざるを得ないだろうが、それまでは極力話したくない、それがアミリアの本音だった。

「……はあ」

こう考えると、自分はなんとも母親らしいことをしてあげられていないな、とアミリアは思った。もしもアミリアの心境をライ・ノライが知ったならば全力で否定しただらう。しかし、アミリアの思いはアミリアだけが知りうるもので、彼女の悩みは今しばらくの間彼女の中に蠢き続けるのであった。

六話（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

七話

霧がこちらの世界に来て一月が過ぎようとしていた。毎日の訓練空しく霧の魔族としての力の使い方は進展を見せることなく今日を迎えている。霧自身はあまり焦った様子はなく、出来ないものは出来ないで仕方ないだろうと達観した考えを持っているが、そうは捉えられない者たちもいる。

アミリアの部屋に集まっているのは部屋の主であるアミリアと、カコ、ライの三人だった。

「それで、魔王様の調子はいかがですか？」

問うたのはライだった。主語の抜けている言葉だったが、その真意はきちんとカコに伝わったらしく、カコは重々しくうなずいてから口を開いた。

「未だに魔素の取り込み方すら出来ておられん」

「それはそれは……」

答えに困る状況ですね、とライは顎に手をやる。

「私の教え方が悪いのかと思いい他の近衛隊の者にやらせてもみたが、やはり結果は変わらぬままだった」

「ふむ……」

それは異常な状態だと、この場にいる三人は共通の見解を得た。

魔族にとつて魔素は、人間が呼吸をするのと同じレベルで“出来て当然”のことなのだ。それが一ヶ月経つても出来ないとなると、霧自身に何か問題があったと考えるのが常道だろう。

「向こうの世界に居る間に、何かあったのかもしれませんが……」
ぼつり、と呟いたのはアミリアだった。

「何か、と申されますと？」

「それは……分かりませんが……少なくとも、坊やは向こうの世界に行く前は魔素を取り込むことは出来ていましたし、簡単な魔法も使用していました」

ライの問いに、アミリアは昔を思い出すように目をつむったまま語る。

「その点に関しては魔王陛下も認めていらっしやいましたから、魔王としての資質も持ち合わせているのはまず間違いないでしょう」

「……と、なると、やはり向こうの世界で何かあったと考えるのが筋ですか……」

ライの言葉に、沈黙が下りる。もしも向こうの世界で何かあったとして、それが何かなどと分かるはずもないからだ。

「今度、私が直接坊やに問いかけてみましょうか」

「そうですね……それがよろしいかと」

ライの返答に、カコも同様に頷いた。魔王に直接物を訪ねるのは不敬にあたる場合がある。状況によっては——例えば最初に霧を召還してすぐの時など——仕方ないとはいえ、基本的には臣下である自分たちが魔王である霧に物を訪ねるのはあってはならないことなのだ。その点、アミリアならば母親であり王妃という立場からも聞きやすい。

— まずは今後の対応を話し合ったこともあって、場の空気が少し軽いものになった。自然と解散の流れになりそうだったその時、部屋にノックの音が響く。

「誰か」

アミリアの代わりにライが答える。すると、返ってきたのは近衛隊のもので、霧から言伝があるとのことだった。

「入りなさい」

「失礼いたします」

慇懃に礼をしながら入ってきたのは、霧の護衛を務めている近衛の一人だった。一体何かといぶかしげにする三人の前にひざまずいて、近衛の男は言った。

「魔王陛下が城下街に出かけたいと仰せです」

その言葉に、思わず三人は顔を見合わせるのだった。

✕ ✕ ✕ ✕ ✕

「さーでどうなるかなー」

魔王の私室内で、椅子に座りピクの入っている瓶を眺めながら霧は呟いた。

いつものように午後は退屈な時間を過ごす予定だったのだが、窓から見える城下街の街を眺めていると、ピクが外に出たがっている様子を見せたのだ。逃げられるかも、と思いながらも霧は瓶の蓋を開けようとしたのだが、蓋はまるで強力な接着剤でくっつけられているかのように固く、霧の力ではびくともしなかった。その様子を見ていたピクが何だかがっかりした表情を浮かべたので、何とかして外の景色を見せてやれないかなと思ったのが、街に出たいと思った切っ掛けだった。

考えてみれば自分はこちらの世界に来てからまだ城内しか歩いていない。それはそれで何とも不健康なことだし、いつそこの機会に一度城下街を歩いてみるのも悪くない。

思い立ったが吉日とばかりに、霧はさっそく城下街に出る旨を近衛の者に告げて外に出かけようとしたものの、それは何故か近衛の者に止められてしまった。どうせ自分に着いてくるのだと思っていた霧は、何故止められたのか分からずその理由を尋ねてみると、どうやら自分が外に出るのにはライ達の許可がいるとの返答があった。

別にそんなものは必要ないだろうと思った霧だったが、扉の前に立つ近衛隊の面々の顔を見ると、強引に行こうとしても止められてしまうなという予想が浮かび、素直に従うことにしたのだ。

そして今はその許可の返答を待っているというわけだ。

「出れるといいなーピコ」

「――」

霧の声に、ピコははにかむような笑みを浮かべた。素直に可愛いと思えるこの妖精と、どうせなら喋ってみたいなと霧は思う。今度時間があるときに――時間はいつも有り余っているが――でもピコとの会話の方法をライ辺りに聞いてみようかと考えていると、部屋にノックの音が響いた。

来たか、と思い霧が入室を許可する旨を言葉にすると、案の定部屋の中に入ってきたのはライ達の元へ言伝を持って行った近衛隊の男だった。

「城下街へお入る許可をいただいてまいりました。ただし、一つだけ条件があるとのことですよ」

「条件？」

「は」

「それってどんな？」

「近衛隊から決して離れないこと、とのことですよ」

「ふーん」

霧はそう返しながら、内心ではそんなもんかと首をかしげていた。近衛隊が自分に付きまといているのは今更なので、わざわざ条件付けされるほどのことではない。霧も見知らぬ街の中を一人で歩きたいとは思わないので、特に思うこともなく、頷きを返す。

「了解、じゃあそれで。今から出て問題ないのか？」

「いえ、近衛隊が着替えをする僅かな時間を頂けたなら幸いです」

「着替え？ 何で？」

「このままで陛下と共に参りますと、陛下の身分を周囲にむやみやたらと知らしめることになりかねますので」

「あー、なるほどね」

確かに全身鎧と剣を携えた人間を十数人もそろそろ引き連れていたらいかにも私は身分が上の者です、と吹聴しているも同然だ。

「じゃあ待つてるから終わったら声かけてくれ」

「は、急ぎ着替えてまいります」
そう言つと、室内に居た半数が部屋から出ていく。全員が着いてくるわけじゃないんだなと思つていた霧だったが、その理由をすぐ知る事となる。

※ ※ ※ ※ ※

「それでは参りましょうか、陛下」
「……」

城の巨大な門の前で、霧は目をぱちぱちと瞬かせた。それもそうだろう。八人と少なくなつた護衛といざ城下街に出かけようとしたら、門の前には私服だろうものに着替えたカコ・イクオールが仁王立ちで待つていたからだ。

「え、お前も行くの？」

「無論です」

「条件は近衛隊を連れて行け、だけじゃなかったっけ？」

「私も近衛隊の一員です」

「あー……」

言われてみれば近衛隊の隊長であろうとも確かに一員ではあるだろう。何だか騙された気持ちでいっぱいになつた霧だったが、ここでごねたら下手をすると外出自体が白紙に戻されない。しぶしぶながらカコの同行を許し、共に行くことにした。同時に、道理で護衛の人数が減つてははずだとも思ひながら。

近衛隊は門から出るとすぐに、一人とカコを残して散らばつて行った。

「あれ、一緒に居ないの？」

てつきり病院の回診の如くずらずらと護衛を引き連れていかねばならないのだろうと思っていた霧は、自分のすぐ後ろに立つカコに尋ねてみた。

「無意味に集まっても余計な視線と輩を集めるばかりです。城内ならばともかく、城下街ではつかず離れずの距離を保って護衛するのが一番よいかと存じます」

そんなものか、とよくわからないままに頷いた霧だったが、同時に疑問も浮かぶ。

「でもさ、どうせ俺が魔王の息子っていうのはあんたが一緒に立っているとか分かるんじゃないか？」

「貴族であれば分かるでしょうが、今はまだ市井には広まっておりませぬ。それに、私自身もあまり民の前には顔を出しませぬ故、陛下が陛下と判断出来るものはおらぬかと」

「へえ」

貴族が知っているのであれば、普通は一般大衆にも広まっていってもおかしくはないのだろうかと霧は思ったが、所詮それは素人考えであることも理解していた。それにここは魔族の国であり、現代人間の世で生きてきた自分の感覚を基準に考えるの自体が間違いなのだろうと結論付けることにした。

霧は護衛のことを一先ず頭からどけて、街の様子を眺めることにした。

城門から出ると、すぐに交差点がある、左右に広がる道は城壁に沿って向こう側へと続いており、正面真っ直ぐは主要街道なのだろう。三車線道路程度の広さを持ったその道の左右には露店のようなものが軒を連ねている。

霧は手に持った瓶の中に居るピコにもよく見えるように気を付けてやりながら、ゆっくりとその街道を歩いていく。露店では様々なものが売っていた。果実もあればアクセサリーもあり、衣服もあれば武器もある。中には祭りの露店よろしく何かの肉を焼いてパンで挟んで売っているものまであった。それが何の肉なのかは分からない

かったが、そその香ばしい匂いを漂わせるその店に思わず足が向いてしまったのは仕方ないことだった。

「へえ、うまそうだな」

「いらっしやい」

中で肉を焼いているのは黒色の肌をした如何にも頑固そうな親父だった。

「これって何の肉なの？」

「シージの肉を香辛料で焼いたもんだよ」

不愛想に質問に答えてくれた親父には悪いが、霧はそんな名前の動物を聞いたことがなかった。助けを求める様にカコに視線を送ると、無表情の彼は霧にだけ聞こえる様に説明をしてくれた。

「シージは草食性の魔獣ですな。一般的によく出回っている肉の一種で、それをパンで挟んで食べるのが民に人気です」

「へえ」

感心するようにして親父の手元を見ていると、買うのか？ と尋ねるような視線を向けられた。食べてみたいのが本音である霧ではあるが、残念なことに彼の手元には金銭が一切なかった。仕方ないな、と離れようとすると、後ろに立っていたカコがずいとお前に出た。

「いくらだ」

「一つ三ギルだ」

「安いな」

「安い美味いがうちの持ち味でね」

「そうか」

そう言いながら、カコは金を親父に渡し、パンでサンドされた肉を受け取っていた。

「どうぞ」

そしてそのままそれを霧に渡すと、また後ろに下がる。

「……いいのか？」

「無論です」

思わず尋ねた霧に、カコはまた無表情でそう言った。今までは何だか取っ付きにくいという印象しかなかったカコの意外な一面を見た気がして、霧は思わず頬を上げた。

「ありがとな」

「とんでもないことです」

長さ十センチ程度のバケットのようなパンに肉が挟んである。霧は滴るソースをこぼさないように気を付けながら、一気にかぶりついた。パンはバケットのようでありながらふんわりとしていて、パンにまでそのソースと肉汁が染み込んでいて、口の中に入れた瞬間香辛料の香りが一気に広がってきた。

「ん……うまい」

もぐもぐと口を動かしながら、霧は感嘆の声をあげた。現代では食べたことのない類の肉の食感と味だった。それでも強いて例を挙げるとするならば、テリヤキバーガーをさらにこつてりしたような味だろうか。すぐに飽きそうではあるが、それまでは手が止まらないような癖のある味をしている。

「これは……いいな」

一気に半分ほどを食べた霧はそんなことを呟きながら店の前から離れる。

「喜んでいただけたなら幸いです」

後ろからカコのそんな声が聞こえた。何も言わずとも傍を着いて離れない彼に、これまでとは違った感覚を霧は覚えた。今までは何度も煩わしいと思っていたのに、今はそんな思いを感じることはない。そこに居るのが当たり前、とまではいかないものの、居ても違和感を感じない、という何とも表現に困るものを、霧はカコに感じていた。

そのままシーザーサンドを食べながら、霧は街道を歩いていく。並んでいる店の種類自体は変わらないのだが、その中にもまた趣向の違う商品を並べてあるので退屈しない。偶に足を止めて聞いてみれば他国からの商品を多く取り揃えてあるようで、商品が似たり

寄ったりでないのはそういった理由があるからか、と霧は納得した。

時折交差点のような場所に着くたびに、霧はカコにどっちに行ったらいいのかを訪ねていた。

「ここを右に曲がれば主に商会の建物があり、左に曲がれば職人たちの工場があります。真っ直ぐに進みますと民の住居が連なる場所に着きますな」

「へえ……」

こと大きな交差点についたときに聞いたその話に、どうやら区画整理のようなものがきっちりされているようだと思ふ。歴史というか、勉強そのものに疎い霧はそれが優れた施政の結果だということには気づかず、そうなのか、と素直に感心する。

商会に行っても仕方なく、工場に行ってもまたどうしようもない。消去法で、霧たちは真っ直ぐに進むことにした。

街路を進んでいくと、確かに人の数が少なくなっており、がやがやとした雰囲気はなくなり住宅地に入り込んだような静けさが目立った。時折すぐ傍を子供たちが走り去っていくのを眺める。今通り過ぎたのは若干白めの肌をした白色の髪をした子供と、黒色の肌に黒色の髪をした子供だった。露店が並ぶときから気になってはいたが、どうやらこの国には色々な種族が共生しているのだな、と思う霧だったが、そこで一つのことを思い出す。

「なあカコ」

「は」

「確かさ、こつちの世界には魔族と人間族、それに亜族ってやつしかいないんだよな？」

「はい」

「だったら今通った子供たちって何の種族になるわけ？」

すると、カコは一度だけ今通り過ぎて行った子供を振り返り、口を開いた。

「あれは両方魔族の子供ですな」

「え、肌の色も髪の色も違うのに？」

「正確に言うならば違うのですが……そうですね。黒色の子供は純粹な魔族であり、白色の方は亜族が魔族へと成った変種でしょうか」

「ん？」

よく分からなかった霧は首をかしげる。そんな説明は今まで聞いたことがなかったからだ。

「そうですね。改めて説明するのも恐縮ですが」

そう言つて、カコは説明を始めた。

そもそも、魔族というのは人間族が魔素を多く取り込んで変種した種族を指すらしい。亜族というものは人間族とは違う進化を経た種族で、その亜族も魔素を多く取り込んでしまふと魔族へと変わるらしい。純粹な魔族と亜族の変種魔族ではまた能力も変わってくるらしく、どちらが優れているというのは判断の付け所が難しいという。

「へえ」

感心したように霧は声を出した。

「あれ、でもそれってさ、じゃあ今でも魔素を取り込んでしまった人間は魔族に変わってしまうのか？」

「そうですね」

「ふーん……」

それだと、最終的に魔族だけの世界になるんじゃないだろうかとも霧は思ったが、その辺りまで聞くと説明が長くなりそうなので今度にすることにした。

それにしても、と霧は首だけで振り返る。そこには少し離れた位置にばらけながらもついてくる近衛隊の面々が居る。ちゃんと仕事してるんだなーと頭の下がる思いながら、通りすぎるときにちらと視線を向けた路地裏にある看板を見て足を止めた。

「どうかされましたか？」

同じように足を止めたカコが霧と同じ方に視線を向けながら問う。

「あれって……何屋になるの？」

住宅地のようなところなのに、店を商っている様子の看板に若干の好奇心が湧いてくる。看板には何かの文字が刻んであるだけで、霧には読めないもので、それが益々好奇心をくすぐる。

「あれは酒場ですな。今は時間のせいもあってそう人は居ないでしょう」

「へえ」

酒場か、と霧は思う。今まで友達との付き合いというものがあまりなかった彼は酒を飲んだことがなかった。流石にこんな時間から飲んでみたいとは思わないが、少しどんなところか見てみたい気持ちもある。

「酒場っていうとガラの悪いのが集まってるって印象があるんだがその辺りどうなんだ？」

「間違ってはいませんな。今の魔王様にはあまりお勧めできない場所ではあります」

「そうか……」

やっぱり不良染みた輩のたまり場なのかと思うも、しかし自分には今百戦錬磨が如き男と、その部下に警護されている身だ。もしも何かあったとしても大丈夫だろうという楽観した考えが霧の中にはあった。

だからだろう、気楽にこんなことを言えたのは。

「ちよつと見てみたいから入ってみようぜ」

「む……しかし」

「どうせあんたとその他近衛隊が居るんだろ？」

「む……」

僅かに唸り悩んでいたカコだったが、霧の最後の言葉に否定の言葉を口にできないと気づいたのか、渋々といった様子で了解を出した。

「ただし、あまり長居はせぬようお願いします」

「分かつてる分かつてる」

そう言っで、霧とカコは酒場へと足を向けた。

それが、霧にとって魔族というものの考え方を変える第一歩になるとは気付かぬままに。

七話（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

長くなりそうなのでわけることになりました。

八話

室内は昼間だというのに、全体的に薄暗い印象を与えた。壁に点々と灯る蠟燭の光だけが窓明かりすらない室内に明かりを灯し、ゆらゆらと揺れる影を生み出している。

室内には六人の男が居た。一人はカウンターの中で静かに腕を組み佇んでいる。五人の男はまだ時刻も昼だというのに酒類の入った木製のコップを片手に大声で喚いている。この店の店主であるカウンターの中に居る男はそんな客に対して何を言うこともなく、やはりじっと立っているだけ。

「――！」

客の男たちの一人が何かを言うと、それに反応してどつとした笑いが起きた。既に出来上がっているのだろう、誰もが自分たちの声が騒がしいという思いを抱くことなく、ただ思い思いの感情を発露させている。

ここは酒場という場所ではあるが、それなりに暗黙の了解というものがある。住宅街の中にあるというのもその理由だが、無意味やたらと騒音を出す輩は本来ならば店主直々に話し合いの場を設けるのが常だ。しかし今は他に客もおらず、また外に響くほどに喧しいわけでもない。よって、店主は酒やつまみの催促を受けるまでは何も言わないのだ。

そのとき、室内に違った音が響いた。それは扉の蝶番が立てる金の音だった。店主だけでなく、騒いでいた男たちもがそちらを向く。

「へえ……こんな感じなのか」

そこに立っていたのは到底この場に似つかわしいとは言えない優男だった。その後ろに続いて現れたのは優男とは対照的な偉丈夫で、更にもう一人中性的な顔立ちをした、計三人が酒場へと入ってきた。

先頭を歩く優男である浅間霧は、店内を興味深そうに眺めながらカウンター席へと近づいていく。その際に一瞬だけ先客である男たちの方を見たが、そのまま視線を動かしてまた店内を眺め始めた。しばらくそんな霧達を見ていた男五人は、興味が失せたかのように視線を戻し、また酒を口に運び出した。

「……いらつしゃい」

カウンターに着いた霧たち三人に、そこで初めて店主である男は顔を上げた。そして霧を見、カコに視線を移したところでわずかに目を見開いた。だが、それだけで店主は何を言うでもなく静かにメニューの書かれたお品書きを差し出した。

「……」

それを受け取った霧はしばしの間それを眺めていたが、そのお品書きをそつとカコに渡した。

「読めない」

ぼそりと呟かれたその言葉に、

「へ……む」

と一瞬口ごもってから、カコは霧に尋ねる。

「……酒類は飲めますでしょうか？」

「あー、そうかそうだな。ここは酒場だから酒を飲むのが普通かあ」

その時、先に居た五人の男たちから笑い声が鳴り響いた。昼間から元気なことだと霧は思いながら、酒を飲んでいいものか悩む。もう二十歳にはなったものの、これまでの人生で酒を飲んだ経験は皆無に等しい。だからこそ酒場という響きに心踊らされるものがあったのだが、果たして今飲んでもいいものかどうか。

「んー……子供でも飲める軽いお酒ってあります？」

「ある」

店主らし男に尋ねるとあっさりと返ってきた言葉に、じゃあそれをお願いと霧は言う。

「つて、あ、勝手に頼んだけどよかったか？」

霧は当然の如く持ち合わせがない。だから、自然とここの支払い
はカコに頼むようになるが、霧が視線を向けると何事もなかったか
のように頷いてから、カコも注文をした。

そこに居たり、霧はカコを挟んで向こう側に居る近衛隊の姿に気
が付いた。そういえば最初に城門を出てからは、カコとこの近衛兵
が一緒に来てくれているのだと思い出したのだ。

「なあ、そういえば名前なんていうんだ？」

体の大きなカコをよける様に前のめりになってその近衛兵を見な
がら霧は問う。するとカコはそれを気遣うように僅かに体を引いて
みせる。そこでようやく近衛兵のカコをはつきりと見ることの出来
た霧は若干驚きの表情を見せた。

「女……？」

はつきりとそう思ったわけではないが、中性的な顔立ちをしたそ
の近衛兵の顔は非常に整っていて、女性と言われても男性と言われ
ても納得してしまう容貌をしている。

だが本当の驚きはその後にやって来た。その近衛兵ではなく、カ
コが口を開いたのだ。

「こやつはシャル・イクオールと申しまして、私の子です」

「はっ？」

「シャル・イクオールと申します」

カコの説明に視線を合わせることなくぺこりと頭を下げたシャル
に、今度こそ霧は驚きの声を上げた。その声は飲んだくれている五
人にまで届いたらしく、喧騒の声がぴたりと止み、霧は少し気まず
そうに椅子の座りを直した。

「そうか……子供かあ……」

カコの子供ということでは不躰な視線をシャルに向ける霧。シャル
はそれに対して微動だにすることなく視線を受け止める。カコはそ
れをどこか楽しそうに眺めている。

「お待ち」

そうしていると店主がそつと木製のカップを差し出してきた。霧

はそれを黙って受け取ると、じいカップの中を見つめ始めた。薄暗い店内ではそれが透明色をしていることしか分からない。今度は鼻を近づけてみるが、果実酒なのか仄かに甘い香りがした。

「何か？」

その行動を不思議に思ったのか、店主が尋ねる。

「いや、俺酒って初めてだから、どんな匂いがするのかなーって思っ
つてね」

その時、またもや五人の間から笑いが漏れた。あまり大きな声で話しているつもりはないものの、どうやらこちらの会話は向こうに筒抜けのようだった。感じ悪いなあと思いながらも、それを理解しながら入ってきたのは自分かと霧は気にしないよう努めた。

「別に何も変なものは入っちゃいねえ。黙ってぐっといきな」

そう言われても、まだ心の準備が出来ていない霧は視線をカコとシャルに向けた。二人は自分が飲むのを待っているのか、カップに手をつけたまま飲もうとしない。自分が先頭をきらないといけないのかと思った霧だったが、脳裏に閃くものがあつた。

「なあ、こっちには乾杯の風習ってないのか？」

「乾杯、ですか。一応あることはありますな」

カコの答えに満足そうに頷いて、霧は言う。

「じゃあ乾杯しよう」

「と、申されましても、何に乾杯しましょうか」

顔だけではなく声までも中性的なシャルの言葉に、少しだけ悩んでから、霧はカップを掲げた。

「そうだな……じゃあ、俺たちの出会いに、乾杯」

「……」

何に驚いたのか、霧の言葉に最初固まっていた二人は、その後少しだけ表情を柔らかかなものにしてから、霧のカップに自分のカップを合わせた。

『乾杯』

それを皮切りに、霧は最初に舐めるようにカップに口をつけて、

それから一口ぐいと飲みこんだ。子供でも飲めるというのは嘘ではないらしく、僅かもアルコールの匂いはなく、ジュースを飲んだような爽快感だけが口の中に残った。

「へえ、おいしいもんだ」

ただ、ジュースに比べるとどこか味わい深いものを感じて、これが酒かと初飲酒に霧は内心浮かれるものを感じた。続けて二口三口と飲んでいき、とうとうカップが空になるまで飲み干した。

「ふー……いいなこれ」

自分が飲んでからカコ達の様子を見てみると、向こうもちょうど飲み終えたのかカップを台の上に置くところだった。

「なあ、あんたやシャルはよく酒を飲んだりするのか？」

「私どもですか……いえ、普段飲むのは水か果実水ばかりでこういった飲み物は口にしませんな」

「へえ、それはまたどうして」

「……」

返答はなかったが、代わりにじっとした視線を向けられて、霧は察した。彼らは近衛隊であり、普段は訓練か自分の警護ばかりしているのだ。

「ふーん……」

呟きながら、霧は以前から気になっていたことを言葉に出そうか悩む。どうして彼ら近衛隊の兵士は自分にそこまで尽くそうとするのか、霧はそれがどうしても理解出来なかった。確かに王である者に傳くのは近衛兵としては当然のことだろう。だが、霧は魔王としての力もなければその地位を引き継いだわけでもない。現段階をもってすれば魔族の中でも最低の力の持ち主のはずなのだ。それなのに、彼らはまるで本物の魔王に忠誠を尽くすかのごとく毎日訓練と警護に明け暮れている。霧にはそれがどういった理由からくるものなのか、憶測をたてることもできない。

どうしようかと悩んでいると、何だか口が寂しくなるのを感じた。あんまり甘えてはいけないとは思いつつも、ついつい霧は口を開い

てしまう。

「なあ、おかわりしてもいいか？」

「む、それは構いませんが、あまり飲まれるのも」

「大丈夫大丈夫。子供でも飲めるものを大人の俺が飲んだって何ともないさ」

知らず大きな態度に出る霧に、カコは言葉を嚙んだ。結局そのまま霧は先ほどと同じ酒を店主に頼み、すぐに持ってこられたそれを一気に飲み干してしまう。

「ぶあー！」

見れば、霧の頬はどこか紅潮しているようにも見える。薄暗い店内の視界なので正しく認識は出来ないが、明らかに今の霧は気分が高揚している——言い換えれば、酔っ払っているように見えた。

「む……そろそろ」

お暇しよう、とカコが霧に声をかける前に、それを遮るような声が店内に響いた。

「おー兄ちゃん結構いける口か？　ならこっちきてちょっと付き合えよ」

そう言ってきたのは五人の男たちの中でも一際がたいのいい男だった。男はカップを片手に霧の首に手を回すと、酒臭い息を吐いてきた。

思わず半身を引いてしまう霧を逃さんとはかりに力強く引き寄せ、男は言う。

「なーにちよろつと強い酒かも知れんが兄ちゃんならいける。さあ飲め」

どん、と男は霧の前に自分が持っていたカップを置く。その中にはまだ並々と酒が入っている。だが、匂いからそれは霧が飲んでいるものとは比べ物にならないほどアルコールが強いものだろうと察したカコがそれを止めようとする。

「ならん」

威嚇するかのように重苦しい声で言うが、酔っ払っている男はま

るでカコの言葉が聞こえなかったかのように霧にカップを近づけていく。

「ほれ、ほれ、ほれ！」

「んー、しかたねえなあ」

何だか気分の良かった霧はよく考えることもなくそのカップを受け取った。

「それじゃあいったただつきまーす！」

カコの制止の声を聞きながら霧は一口それを含み、

「ぶふー！」

吐き出した。

「——てめえなにしゃーがる！」

「なんだよこれー、まずいじゃん」

霧は自分が酒を吹きかけた男には目もくれず、じーとカップを眺め文句を言う。そして何がおかしいのか、けらけらと霧は笑い始めた。

それに反応したのが男と、テーブル席を陣取っていた残りの四人だった。

「おう兄ちゃん、俺の酒にけちつけやがったな」

がたん、と音を立てて男たちが立ち上がる。自分を見つめてくる男達の視線に、わずかに酔いが覚めてきた霧は状況を把握し始める。

「んー……なあ、カコ。これはまずいのか？」

「あまり褒められた状況ではありませんな」

「そうかそうか。大丈夫か」

ははは、と笑う霧は次の瞬間、胸倉を掴まれ宙に浮いた。

「貴様！」

咄嗟に手を出そうとしたカコを、しかし霧は掌を向けて止める。

「だーいじょうぶだいじょうぶ」

自分が宙に浮いているというのに何を根拠にそういうのか、霧は苦しそうにしながらもカコに首を向けてそんなことを言う。

だが、自分を無視されていると感じたのか、男は霧を締め上げるかのように持ち上げる。

「う……ぐ……」

苦しそつにする霧に、男は酷薄な笑みを浮かべる。仲間だろう四人の男もそれを見て噤し立てるかのように声をあげる。

カコもシャルも手を出しはしない。それは魔王である霧が大丈夫と言った言葉に従っているまでであり、もしも許可さえ出ればすぐさま男たちを叩きのめしてしまうだろう。

「おう兄ちゃん、すいませんでしたって頭を下げな、そうしたら許してやらんこともないぜ」

「――」

霧の口がぱくぱくと開く。何かを言おうとしている霧に、男は頬を持ち上げるとゆっくりと霧を下した。苦しそつに呼吸をする霧は、しばらく咳き込んでいたが、すぐに調子を戻すと、頭を上げて笑った。

「酒くせーんだよ、禿げ」

次の瞬間、霧は吹き飛んだ。

✕ ✕ ✕ ✕ ✕

魔族とは、人間族が大量の魔素を取り込んだことにより変質した存在と考えられている。魔族へと変質した者は元来持ち合わせている腕力などが全体的に上がり、魔素を使用した魔法を使えるようになる。

もちろん人間族にも優れた膂力を持つ者もいるが、平均的、総合的に見た場合、魔族の方が種族として優れているというのは変える

ことのない事実なのである。

そして現在、霧は何の力も持たない人間族と変わりない肉体の持ち主である。それが腕力の優れた魔族に殴られた場合の結果は推して知るべきである。

※ ※ ※ ※ ※

霧は吹き飛んだ。それは殴った男ですら驚くほど軽く、そして勢いよく壁にまで到達し、壁にひびを入れてしまった。本来であれば少し顔を吹き飛ばす程度しか男は想像していなかった。それが、どうしてかまるで自分が“貴族のように強大な”力を得たかのような吹き飛ばし方をしてしまった。

しばし呆然と霧と自分の拳を見つめていた男は、酔いが醒めたかのようにつまらない表情を浮かべた。

「ちっ、何だよしくてやがる」

そのまま自分たちのテーブルに戻ろうとするのを、しかし許さないものがいた。

「……」

カコ・イクオール、その人である。その子であるシャルは壁に背を預けたまま動かなくなっている霧の元へと向かっている。

「なんでえ、やんのか」

「……」

道を遮るカコに、男は意気込む。だが、そんな程度の気迫では、カコを脅かすには到底足りるわけもなかった。始まるうとする喧嘩の空気に、仲間である四人の男たちも再び腰を浮かせ、カコを取り囲むように陣取り始める。

「おう、やんのか？」

その状況になっても微動だにしないカコに苛立ちを覚えたのか、先ほど霧にしたように、男はカコの胸倉を掴んだ。

しかし、

「お……」

その体は浮かび上がるどころか、びくともしない。まるで巨大な樹を持ち上げようとしている印象を覚え、男は思わず手を放した。そして次の瞬間、近衛隊隊長、カコ・イクォールは動いた。

※ ※ ※ ※ ※

霧は夢を見ていた。それは今となっては遠く遠く昔に見たことのある夢だった。それが夢であるということを認識しているのは、きつとその夢の中に、今は亡き母親が出ていたからだろう。

顔には靄がかかったかのようにになっているが、確かにそれが母親であると霧は確信していた。

夢の中の霧は、先ほどまで同じクラスの男子と喧嘩をしていた。霧一人に対して向こうは十人という多勢に無勢もいいところの喧嘩ではあったが、しかし霧は圧倒的なその力でもって相手をコテンパンに叩きのめしていた。

もちろん、そうなたら悪者になるのは霧のほうだった。向こうがいじめの対象として霧を選び、霧はそれに抗っただけなのに、結果だけを見れば暴れていた霧を周囲のクラスメイトが止めようとして、全員が怪我をさせられたという結果だけが残ってしまった。

保護者である母親は学校に呼び出され、暴れたと思われる霧は一人一人に頭を下げなさいと担任に言われたが、決して彼は頭を

下げることはしなかった。彼にとって、クラスメイトの面々を叩きのめしたのは悪いことではなく、自分を守るための正当な行動であったからだ、しかしそれで納得するのは彼だけであり、叩きのめされたクラスメイトの親たちはこぞって霧、そして霧の母親を攻めた。

彼は納得が出来なかった。出来なかったが、これ以上自分の母親が攻められる姿は見たくなくて、結局一人一人に頭を下げた。

帰り道、彼は涙を瞳に湛えながら言った。

「僕は悪くない」

それに対し、母親は言う。

「そうね」

それ以上母親は何も言わなかった。霧も、何も言わなかった。ただ、母親だけは霧の味方でいてくれることを彼は感じていた。同時に、自分の言動がこんな悲劇を生み出していることもまた理解していた。

浅間霧という人間は、周囲と比べるまでもなくなんでも出来てしまう少年だったのだ。何でも出来るから、霧はそうではないクラスメイトからすれば異物でしかなかったのだろう。だから、彼は虐められ、避けられ、迫害されていた。

彼自身はそれに対して思うことはなかった。ただ、それが結果的に母親の心労になっているのではないかという不安だけがあった。そして、その不安は数か月もしないうちに現実となった。母親はこの世を去り、彼は一人になった。彼はそれを、自分の所為だと思った。自分が母親に迷惑をかけてしまったから、こうなってしまったのだと。だから、彼はこう考えた

——自分が普通であれば、母親に迷惑はかからなかったのだろうか？ と。既に母が亡くなってしまった後となってはもはや確かめようがない。だが、確かめようがなかつと、彼は自分の行いを悔いた。悔いて悔いて、そうして彼は普通の人間になることを選んだ。

——それは、霧が人間となった日のことだった。

✱ ✱ ✱ ✱ ✱

「い……て……」

「目を覚まされましたか、陛下」

目を開けると、猛烈な痛みが体中にあつた。特に痛いのが左の頬で、まるで感覚が麻痺しているかのように、ぼんやりとした鈍痛がある。

「あれ、俺どうなつたんだっけ……」

「あ、まだ動かせないでください」

立ち上がるうとした霧を、シャルが押しとどめる。

「あ、それって……」

先ほどからずっと自分の左頬に当てられているシャルの手が光っているのを見て、霧は呟く。

「ライが使つてたのと同じ……？」

「はい。治癒をほどこしています。ノライ様に比べれば私の力など到底及びもしないのですが」

それが謙遜なのかどうかは霧の判断のつくところではなかったが、少なくとも段々と痛みが取れていくこの感覚は嘘ではないと霧は思った。

「どうなつたんだっけ……？」

抑えられているために置きあがることは出来なかったが、首と視線を動かすことだけは出来た。まだぼんやりとする視界の中で、視線を彷徨わせっていると、突如鈍い音が聞こえた。

「？」

それが何かと考えると、向こうからカコが近づいてくるのが見えた。

「陛下、御無事ですか？」

「はは、どうなんだろう」

一体自分がどうなっってこんな状況になっているのかすら分からない霧には、その質問は答えられそうにはなかった。

「陛下の調子はどうだ？」

今度はシャルに訪ねるカコ。

「……もう少し、時間がかかります」

「そうか……」

深刻な表情を浮かべるシャルにそれだけ言っと、カコは霧から離れていく。

「ああ……なあ、何があっただけだっけ？」

「……陛下は先ほどの暴漢に殴られました」

殴られた、とシャルは言う。殴られた、殴られた……そう反芻していると、段々と先ほどの記憶を思い出してきた。

「ああ、そうか……俺、喧嘩売っただけだ……」

そうして殴られてしまったのだと、ようやく霧は思い出す。同時に、あれは痛かったな、とも。

「魔族って、強いんだな、シャル……」

「……」

霧の呟きに、シャルは答えない。代わりというわけでもないだろうが、霧の治癒に全力を注いでいる。シャルの返答がないというのに、霧の呟きは続く。

「俺、喧嘩してたことないと思うんだけど……あんなに吹っ飛ばされたのは生まれて初めてだよ」

そう言ったあとに、霧はあれ、と思う。

「俺、喧嘩したことなかったっけ……？」

先ほどで、自分は喧嘩していた自分を見ていたような気がする。

それはいつの頃のことだろうか、思い出そうとしても、中々思い出

せない。

「なあ、なんか頭がぼんやりするよ」

「もうしばらくお待ちください」

そう言われても、何だか落ち着かないものは仕方がないだろうと霧は思った。思い出さないといけないことを無理やり忘れさせられているようで、何だか気持ちが悪い。それともこれは殴られた影響だろうか、と考えるが、違うという自分が居た。

——魔族って、強いんだなあ。

殴られて吹き飛んだ自分。そして、去っていくカコの中。自分を治してくれているシャルの魔法。

そのどれもが霧に自分とは一線を画した強さを感じさせ——同時に、それは自分にも出来るのではないかという思いを抱かせるのだった。

どうしてこんなことを考えるのか、霧にはよく分からなかった。分からなかったけれど、それが何だか重大なヒントのようにも思えて、霧は何度も何度も、その思いを反芻していた。

✖ ✖ ✖ ✖ ✖

「迷惑をかけたな」

既にのした四人の男には目もくれず、カコは店主に近づいてそつと金貨を数枚差し出した。しかし店主はそれを抑える様にして、口を開く。

「イクオール様から御代を頂くわけにはまいりません」

「む……知っていたのか」

「はい。先代魔王陛下がご存命の頃に何度か」

「そうか……だが、迷惑をかけたのは事実であらう。とっておけ」

物も言わずに、カコは金貨を店主の手に握らせると、そこで初めて自分が叩きのめした男たちへと視線を移した。まるでゴミを見るかのようなその視線の先では、カコを取り囲んでいた男たちが息も絶え絶えに倒れこんでいる。これでもカコは手加減したつもりだったのだが、思いのほか力が入っていたのかもしれない。自分の目の前で魔王に手を出されるという失態を、八つ当たりの如くぶつけてしまっていたのだらう。未熟な自分を窘めるように、カコは息を吐いた。

だが、一人は逃がしてしまったものの、残りは痛めつけることが出来た。あとは霧の傷を治せば良しとするべきだらうかと思うが、この情報がライ・ノライに伝わってしまうとうるさいことになるだらうと、カコは先ほどとは違った意味のため息を吐く。

それもいいのかもしれない。カコはそう思う。自分がすぐ傍に居たというのに霧が傷ついてしまったという事実は変えようのないものだ。だが、自分を罰するものは魔王という存在を除けばそれこそ数が知れている。だから、もしもライに何かを言われようとも甘んじて受けようと思った。

八話（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

九話

霧が酒場で怪我を負ってから一夜が明けた。肉体的な傷はシャルが施した治療によって治っていたが、精神面にもダメージがあったのか、霧は城に帰るなりベッドで横になっていた。

カコはアミリアとライにあつたことを包み隠さず話し、案の定ライはカコの行動を責めた。アミリアは何も言わなかったものの、その辛そうな表情こそがカコにとっては何よりもの責め苦に感じるのだった。

そうして霧は次の日の朝まで目を覚ますことなく、どこか重い空気を残したまま一夜が明けた。

目を覚ました時、霧は倦怠感のような重さを体を感じた。ゆっくりと頬や額、腕や足を触っていくも、どこにも怪我らしきものはない。筋肉痛でもないし、風邪の時に感じる関節痛でもない。ただ、だるい。まるで夢が獺に食べられてしまうかのようになり、やる気が何か見えない動物にでも食べられてしまったかのようなだるさだ。

どこかぼんやりとした意識のまま、霧は室内を見渡した。メイドも居なければ護衛も居ない。しんと静けさを漂わせる室内を見ると、湧水が染み出すように、ゆっくりと昨日の出来事が脳裏に浮かびあがってくる。

自分は酔っていたのだろうと霧は思う。でないと、あんな挑発的な態度を自分が取るはずもないのだから。そう、確かに自分は酔っていた。けれど、あつた出来事は鮮明に思い返すことが出来る。自分のはあの酔っ払いに喧嘩を売り、たった一発のパンチで気を失ってしまったのだ。

情けない、とは思わない。霧は自分が平均的な身体能力と平均的な頭脳しか持っていないことを自覚しているし、これまで学校で築き上げてきた成績が何よりもそれを教えてくれている。だから、人間よりも大きな力を持っている魔族の、それも腕力に優れていそう

な男に一撃でのされてしまったことだって、ある意味当然とも思えてしまう。だから、悔しいとか、そういった感情は浮かんてこなかった。

その代りと言っては何だが、霧は自分が何のためにここに居るのが分からなくなっていた。元々こちらの世界における自分に価値を見出していたということはなかったが、昨日のことがあってそれはますます大きくなっている。

アミリア達が自分をこうして丁重に扱っているのは、自分が先代魔王の息子であり、魔王としての可能性を秘めているからだ。それなのに、その対象である霧は三週間経っても魔族としての基本を修めることもできず、その辺の暴漢にやられてしまう始末だ。いくら霧に魔王になる気持ちになかったとしても、色々と考えさせられるものがある。

霧は立ち上がった。靴を履き、ゆつくりと窓辺に近づき、外の景色を眺める。城門の前には二人の近衛兵らしき者が立っていて、その向こう側では昨日と同じ様の露店商が色々な商品を並べており、その前には多くの客が眺めている。更に奥を見れば、きっと昨日行った住宅街のような静かな光景があるのだろう。

そのどれもが、何だか遠い、テレビの向こう側で起きている出来事のように霧は感じた。現実感がない、とでもいえるのか。自分が見聞きしている出来事なのに、それは全てまやかしのではないかという違和感がある。

「……はー」

霧は天井を仰いだ。まだ疲れているのかもしれない。無自覚に昨日の出来事がトラウマのようになっていて、単にそれを思い出さくないだけなのかも、そう霧は思った。

こんな状態で今日もまた訓練があるのだろうかと思うと、若干憂鬱な気持ちになる霧だった。

と、その時小さな音がした。その出所を探してみると、テーブルの上に置いてあるピコの方から音はしているようだった。霧がテー

ブルに近づくと、ピコが瓶を両手で叩いているところだった。

「どうしたんだピコ？ 何かあったか？」

椅子に座り、そう語りかける霧。しかし、こちらの問いかけは向こうに届いても、向こうの言葉はこちらへ届かないことは数日間ではつきりとしている。

ピコは瓶の中でパタパタと羽を動かしながら必死に仕草で何かをこちらに伝えようとしている。が、ピコの健闘空しく、彼女が何を伝えたいのか、霧には全く分からなかった。

「んー……元気をさせ、とでも言いたいのか？」

思いつきで吐いた言葉だったが、どうやらピコの言いたいことを当ててしまったらしく、彼女はこくこくと頷いている。

「そっかそっか、はは……」

霧は苦笑を浮かべながら瓶をつんつんと小突いた。未だ倦怠感は薄れないものの、この小さな妖精に癒されるものを感じた。

そんな彼女と、そろそろ本当に喋ってみたいなと思う。今日あたり、昼食後にでもその方法について聞いてみるかと、愛くるしい妖精を見つめながら霧はそう考えるのだった。

✕ ✕ ✕ ✕ ✕

ライ・ノライは執務を行う部屋の中で、一つの書類とにらみ合っていた。まるでその書類が親の仇でもあるかの如き視線は、普段の彼からは決して感じ取れないものである。

取り分けて緊急事態を知らせるものではないのだが、落ち着いてことを構えるわけにもいかない。書類にはそういった類の内容が記されている。彼は眉間に寄っていた皺を意識してほぐすと、手に持

った紙を机の上に放り、椅子の背もたれに体を預けた。自分の体重を支えて軋む音を聞きながら、どうしてこうも面倒なことはまとめやってくるのかとライは思った。

昨日の霧が暴行を受けた件は、実を言えばカコから報告を受けるまでもなくライの耳に届いていた。カコが近衛隊で霧の傍を守っているように、ライはライで専属の諜報部隊とでも言うべき人員を用いて霧の周囲を見張っている。流石に時間帯もあり酒場の中に入ることまでは出来ていなかったものの、帰り際にシャル肩を貸してもらって歩いている姿を見れば中で何があつたかを推測するのは容易いことだった。

アミリアがカコを責めるようなことはしなかったが、ライは自分でも不快になるくらいにねちっこくカコを責めた。カコも言い訳じみたことを一切言うことなくそれを受け止めていたので、一時間もしない内に言うことはなくなっていたが、本来であればまだまだ言いたいことは山ほどあつたのだ。だが、それを言わなかったのも、もう起きてしまったことをどうこうするよりも、これから霧をどうしていくか、という話し合いの方が重要だったからに過ぎない。

そもそも霧の外出に三人が許可を出したのも、彼にもっとこちらの世界に愛着を持ってもらおうという下心が働いたからに過ぎない。それが逆に怪我をして帰ってきてしまったのでは本末転倒も良い所だ。これでもしも霧が外に出ることに忌避感を覚え、更にはこの世界で暮らすことそのものに否を感じられてはライ達の思惑は全て崩れ去ってしまう。

話し合いの結果、今日一日は霧にじっくり休んでもらってまた明日から訓練を再開するようにはしているが、霧が訓練の再開を快くやってくれるかは分からない。

それに――

「――思ったよりも早かったですね」

ライは放った書類――正確には便箋であるそれに視線を落とす。その右下、記した者の印象が押されたそのマークを見て、再び眉に

力が入る。それはギリアムの東から南南東にかけて存在する『グーア』という国に居る貴族が用いる印章だ。グーアは人間族の国家と国境を接していて、人間でいう所の辺境伯を担っている。人間族国家と接しているためか、本人も酷く好戦的な性格をしているのをライは覚えている。好戦的なのは魔族全般にいえることだが、彼の貴族のそれは他の魔族の追隨を許さぬものがある。

そのグーアの頂点に居る貴族が、魔王である霧と会いたい旨を記した手紙を持った特使をよこしたのが今日の今朝方の話だ。まだこの手紙の存在はライの所で止めてあり、アミリアには知らせていない。昨日の今日でまたもやアミリアに沈痛な思いをさせるのも苦であろうというライの気遣いからの行動だったが、どちらにせよ知らせぬわけにはいかない。国内貴族の顔見世の嘆願書であればいくらでも断れるが、流石に他国の、それもトップに君臨する貴族の手紙を無視するわけにはいかないからだ。

ここで重要なのは、ライ達は霧の存在はまだ他国には“正式には”知らせていない点である。霧が魔族としての記憶を持ち、魔王としての力を持っていたならば即座にその存在を周囲の五カ国に知らせていただろう。だが、現状がアレな霧を魔王として知らしめるわけにはいかず、情報を国内だけに留めていたつもりではあったが、やはりというべきか、魔王召還の儀式をいつまでも他国に知られずにはいられなかったらしい。

それはライ達も予測していたことではあったが、知られるのは一ヶ月から二ヶ月はかかるだろうと考えていた。それが一ヶ月もしない内にこうして書状が届くことになるとは、どうやら国内の貴族の誰かが漏らしたと考えるのが常道だろう。

「全く、余計なことばかりしてくれるものですね……」

ふう、と息を吐く。ただでさえこっちは霧の力が戻らないでヤキモキしているというのに、それに拍車をかけるかのような状況を呼び寄せなくてもいいだろうと、誰にでもない愚痴を内心で吐く。

だがいつまでもこうして手紙を向き合っても仕方がない。一

一つ確実に片を付けるために、ライはメイドを呼ぼうと机の上にある鈴を鳴らそうとして、その前に響いたノックに顔を上げた。

「誰です？」

「私です」

その声は霧の様子を普段から監視しているメイドの声だった。

「入りなさい」

読んでもないメイドが訪ねてきたことに眉を顰めながら、ライは入室を許可する。

「失礼いたします」

いつものように優雅な一礼をして、メイドは部屋に入ってくる。

「どうしました？ 今日には特に用事があるとは言ってなかったかと思いますが」

「はい。それはそうなのですが、魔王様についてご報告がありました」

「ほう」

そこで初めて、ライは聞く体制に入る。

「魔王様に何かありましたか？」

「特別これといって何かがあったわけではないのですが……魔王様は本日も訓練をされる様子です」

「……おかしいですね。確かイクォールの下の方から今日は訓練は中止する旨の報告が魔王様にあつたはずですが」

「はい。それはあつたのですが、お食事中に魔王様直々に本日も訓練を行いたいという言葉を抑せになられまして、王妃様がお止めになられても頑なにすると仰られまして」

「ふむ……そうですか……今は魔王様どちらに？」

「もう既に訓練室に向かわれている頃かと」

「分かりました。貴女は仕事に戻ってくれて結構です」

「かしこまりました」

一礼をして、来た時と同じように楚々とした動作で彼女は去って行った。

「……ふむ。これは、いい吉兆と捉えるべきなのですかね？」
ライの声は、どこか喜色を含んだものだった。

✽ ✽ ✽ ✽ ✽

何故か観客の多い日だな、と霧は思った。いつもの訓練室に、今日はいつもの近衛兵とカコ、それに加えてアミリアとライの姿があったのだ。もしかしたら休みだというのに自分から訓練を申し出たのが珍しくてこうして見に来たのだろうか、何だか気恥ずかしいものを霧は感じた。

確かに今日は元々やる気の出ない一日だったことは霧自身、自覚のあることだった。だけれども、ピコの励ましがあつたからなのか、こう、頑張らないといけない、という気持ちが自分でも知らず知らずのうちに湧いてきて、どうしても今日は訓練をしなければならぬという気持ちにさせられていたのだ。倦怠感はまだあるし、だるいという気持ちももちろんある。それでも、自分の内から湧いて出たこの決意に何か意味があるような気がして、今日も訓練をすることにしたのだった。

だが、決意があるからといっても、訓練がうまくいくわけでもなかった。霧はいつものように胡坐をかいて静かに瞑想しながら、大気に満ちる魔素とやらを感じようと努めた。だが、一時間が過ぎ、二時間が過ぎてもそんなものは一切感じられなかった。時折休憩を挟んで近衛隊の面々に色々聞くと、この一ヶ月で既に聞きつくした感はある。近衛兵もそれが分かっているのか、霧の質問に答える時はどこかやりづらそうな表情を浮かべていた。

「ふー……」

もうあと三十分で訓練も終わりというときになって、霧は集中力を切らして息を吐いた。両手を後ろについて、顔を上にあげて、力を抜く。そしてこった首筋をほぐすかのようにな左右に振ると、こきこきと小気味いい音がした。

「だめかー……」

霧がそう呟いていると、アミリアが近づいてくる。その手には近衛兵から受け取ったであろう水筒を持っている。

「坊や、どうぞ」

「あ、あー、どうも」

思わず近衛兵かと思いい気安く声をかけようとして、霧は戸惑いながら水筒を受け取った。誰が近づいてきたか分からないくらいに疲れていたのかと、ここにきて初めて気が付いた様子だ。受け取った水筒から水分を補給し、出来るだけ視線を合わせないようにしながら、霧は水筒を返した。

「……」

「……」

アミリアが見つめ、霧がそっぽを向く構図が生まれる。アミリアは何も言わず、霧は何も言えない。気持ちとしては、運動会に保護者が来た時のような気まずさがそこにはあった。

「じゃあ、続きするんで」

とうとう耐え切れなくなって、霧はそう言っアミリアの返事も待たずに目をつむった。そうすると、暗闇の中で近くにいたアミリアが去っていく足跡が聞こえた。内心で安堵の息を吐きながら、霧は暗闇の中に意識を落とそうとする。

この一ヶ月で、集中するということには慣れが生まれていた。最初の内は雑念ばかりが浮かんでただ座って考え事をしているだけ、というのが常だったのに、今では真つ暗な世界で何も考えない状態を続けることが出来ている。それは言い換えれば、考えたいことだけを考えることができる、ということでもある。

ふと、霧は昨日のことを思い返した。吹き飛ばされて、治癒して

もらったあの瞬間のことだ。あれは一体どんな原理で吹き飛ばし、治していたのだろうか？

吹き飛んだのはまだ分かる。魔素とやらが体を強化していて、特別な何かをしなくても腕力が増強されていたのだろう。では治癒はどうか。人の肉体は傷つけば超回復で治るようになっていて。それを促進させているのか、はたまた魔素とやらがまた何か関係しているのか。多分後者だろうと霧は思う。だって、魔素がないと魔族は魔法を使えないと言っていたはずだから。

——なるほど。と霧はどこかすっきりした気持ちでそう思った。要は、魔素というのは空気と一緒になのだ。体の中に空気が入り、酸素を供給する。魔素はその酸素と違うけれど同じようなものなのだろう。それを皮膚呼吸で受け入れるようにすれば……

「ん……？」

その時、霧ははつきりと何かが自分の中に入ってくるのを感じていた。その感覚に驚いてそっと目を開けてみると、そこでは自分よりも驚いた表情を浮かべるアミリアの顔があった。

「うおっ」

「坊や……」

思わず驚きにのけぞってしまい、後ろに倒れた。すぐに体を起こして周囲に視線をやると、そこにもアミリアのように驚きに目を見開いた誰彼が居る。

——もしかして、今のが魔素を取り込むってことなのか？

「なあ、今のって」

「はっ——今のが、魔素を取り込むということであります」

霧の疑問に、カコが答えた。霧はその返答に嬉しくなり、もう一度目を瞑って想像してみた。自分の皮膚の汗腺から呼吸するかのように、酸素のような分子を取り込むように……

そうイメージすると、先ほどよりも多くの何かが体内に入っているのを感じる。同時に、身を包んでいた倦怠感がどんどん薄れていく気がした。だが、きっとこれは気のせいではない。そう、これ

が――

「取り敢えず、第一歩は成功、かな？」

――霧の、魔族への第一歩だった。

✱ ✱ ✱ ✱ ✱

霧の訓練が終わり、昼食が終わってから、アミリアとライの二人はライの執務室にいた。二人ともどこか機嫌のいい表情を浮かべていて、この場に流れている空気も昨日とは打って変わったものとなっている。

ライも、昨日から続く不祥事に悩ませていたものが一つ取れた気がしてどこか晴れ晴れとした顔をしている。

とはいえ、これからまた詰まらない話をアミリアにしないといけないのかと思うと頭の痛いところだが、何も嬉しいことがない状況に比べればましかと頭を切り替えることにした。

「王妃様、お喜びの所大変心苦しくはあるのですが……こちらを……」

そう言つて、ライは今朝届いたばかりの便箋をアミリアに渡す。

ライの表情にあまりよろしくないものを感じたのか、気持ち顔を引き締めながら、アミリアは受け取り、中身を読んだ。

「……」

「……」

沈黙。先ほどの晴れ晴れしい空気はどこへやら、途端に重苦しいものが室内に蔓延し始める。だが、それでも朝一人でライが見たときに比べればましな状況下で手紙を読んでいると思う。今朝はまだ、霧が魔素を取り込むことを出来ていなかったのだから。

「……そうですか、もう状況は差し迫ってきているのですね」

「はい……この様子だと、その他の国からも同様の書状が来るかと思われれます」

「そうですね……ですが、まだ時間があります」

そう、例えば他国に霧の存在が知られたとしても、今の現状までも知られるというわけではない。魔王が誕生したという正式な報告はあと数か月後に行われる舞踏祭で十年前からの約束があるので、急かされる謂れもない。

「ライには迷惑をかけますが、何とかその書状はうまくかわしておいていただけますか？」

「無論にございます」

アミリアから返された便箋を受け取りながら、ライは頷いた。

そうして、また場には沈黙が訪れる。だが、それは今までに訪れたものに比べると遥かに軽度のものであることは、二人ともが認識していることであつた。

アミリアはライの後ろに流れる空を見つめた。そこには蒼穹の中に綿のような雲が浮かんでおり、それはまるでこれからのアミリア達を示しているかのように、その目には映るのだった。

九話（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0702y/>

最弱国家の魔王様

2011年11月8日22時43分発行